青森市埋蔵文化財調査報告書　第95集

野尻（4）遺跡

発掘調査報告書

平成 19 年度

青森市教育委員会

青森市埋蔵文化財調査報告書　第95集　野尻（4）遺跡　発掘調査報告書　平成19年度　青森市教育委員会

青森市埋蔵文化財調査報告書 第95集

野 尻 (4) 遺 跡

発掘調査報告書

平成 19 年度

青森市教育委員会

序

平成17年４月に旧青森市と旧浪岡町との合併により市内の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が約400ヶ所となりました。

今回、調査した野尻（４）遺跡は、浪岡地区に所在する平安時代の集落遺跡であり、倉庫建設工事に先立ち、建設予定地内について発掘調査を実施しました。その結果、平安時代の竪穴状遺構２基、土坑５基、小ピット９基、溝状遺構４条、該期の遺物等が検出されました。

本書は、このたびの発掘調査成果をまとめたものであり、今後の埋蔵文化財保護ならびに調査・研究の一助となれば幸いです。

本書の刊行にあたり、調査委託者であります株式会社大進建設をはじめ、関係機関および関係各位のご理解とご協力に深く感謝いたします。

平成20年３月

青森市教育委員会

教育長　**角　田　詮二郎**

例　　言

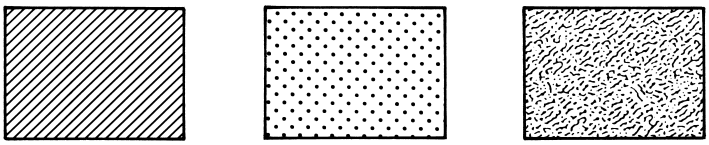
1．本書は、株式会社大進建設から青森市教育委員会が委託を受けて発掘調査を実施した野尻（4）遺跡の発掘調査報告書である。
2．本書に記載される内容は、株式会社大進建設が計画した倉庫建設工事に係る発掘調査成果をまとめたものである。
3．本遺跡は、青森市浪岡大字徳才子字山本に所在し、青森県埋蔵文化財包蔵地台帳では遺跡番号29063として登録されている。
4．本書の執筆ならびに編集は、青森市教育委員会が行った。執筆分担は各文末に記した。
5．出土遺物および記録図面、写真関係資料は青森市教育委員会が保管している。
6．引用・参考文献は巻末にまとめた。
7．発掘調査および報告書の作成にあたって、次の各機関・各位からご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表する次第である。

青森県教育庁文化財保護課、青森市史編さん室、株式会社大進建設、木村浩一、北林八洲晴、工藤清泰

凡　　例

1．図版番号および表番号、写真番号は本書を通じて連続するものとし、「第〇図」、「第〇表」、「写真〇」とした。
2．遺構の略称は、SI＝竪穴状遺構、SK＝土坑、SP＝小ピット、SD＝溝状遺構とした。また、遺物図版には括弧内に出土遺構あるいは出土グリッドを明記した。
3．図中・文中で使用したアルファベットを用いた略称は、以下の通りである。
　Ｐ…土器　LB…ロームブロック　B－Tm…白頭山－苫小牧火山灰
4．図版の縮尺は各図毎に示した。また、写真図版の縮尺は統一していない。
5．土層の注記は『新版標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄1993）に準拠した。
6．遺物実測図・遺物写真図版の縮尺は、1/3である。
7．図中で使用したスクリーントーンは以下の通りである。なお、須恵器断面は黒ベタで示した。

地山（Ⅵ層）　　内面黒色処理　　火ダスキ



目　　次

序
例言・凡例
目次
図表・写真目次
第Ⅰ章　調査の概要 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査要項 …… 1
　第３節　調査方法 …… 3
　第４節　調査経過 …… 3
第Ⅱ章　遺跡の環境 …… 4
　第１節　過去の調査 …… 4
　第２節　基本層序 …… 5
第Ⅲ章　検出遺構と出土遺物 …… 7
　第１節　竪穴状遺構 …… 7
　第２節　土坑 …… 10
　第３節　小ピット …… 12
　第４節　溝状遺構 …… 18
　第５節　遺構外出土遺物 …… 22
まとめ …… 24
引用・参考文献 …… 24
写真図版 …… 25
報告書抄録

図表・写真目次

図版

第１図　遺跡の位置 …… 2
第２図　グリッド設定図 …… 3
第３図　過去の調査区 …… 4
第４図　基本層序 …… 5
第５図　遺構配置図 …… 6
第６図　竪穴状遺構 …… 8
第７図　SI－01出土土器 …… 9
第８図　SI－01・02出土土器 …… 10
第９図　SI－02出土土器 …… 11
第10図　土坑 …… 13
第11図　SK－04出土土器 …… 14
第12図　SK・SD出土土器 …… 15
第13図　SD・遺構外出土土器 …… 16
第14図　小ピット …… 17
第15図　溝状遺構(1) …… 19
第16図　溝状遺構(2) …… 20
第17図　溝状遺構(3) …… 21

表

第１表　周辺の遺跡 …… 2
第２表　出土遺物観察一覧 …… 23

写真図版

写真１　検出遺構(1) …… 26
写真２　検出遺構(2) …… 27
写真３　検出遺構(3) …… 28
写真４　検出遺構(4) …… 29
写真５　出土遺物(1) …… 30
写真６　出土遺物(2) …… 31
写真７　出土遺物(3) …… 32
写真８　出土遺物(4) …… 33

第Ⅰ章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

平成18年10月30日、青森市教育委員会文化財課に青森市浪岡大字徳才子字山本の倉庫建設工事に係る「埋蔵文化財（遺跡）等協議書」が株式会社大進建設より提出された。遺跡の位置関係を照合した結果、建設予定地が野尻（４）遺跡（青森県埋蔵文化財包蔵地台帳番号29063）に該当していることが明らかとなり、平成18年11月16日に発掘調査の要否を目的に確認調査を実施した。確認調査は建設予定地内に任意のトレンチを８ヶ所（調査面積52㎡）設定し、重機による掘削および鋤簾がけを行った。調査の結果、予定地全体に砂利・シラスが盛土されていたが、西側に設定したトレンチ３ヶ所より、平安時代と考えられる竪穴状遺構１基、土坑１基、溝状遺構１基を確認した。また、平成19年度には当初の事業用地が拡張されるのを受け、６月15日に拡張部分の確認調査を実施した（調査面積24㎡）。確認調査結果を受けて、事業者と協議し、平成19年７月12日～８月９日の日程で発掘調査を実施することとした。

第２節　調査要項

１．調査の目的

倉庫建設工事に先立ち、予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図り、地域における文化財の活用に資する。

２．遺跡名および所在地

野尻（４）遺跡（青森県埋蔵文化財包蔵地台帳番号　29063）

青森市浪岡大字徳才子字山本105－２・３

３．発掘調査期間　平成19年７月12日～平成19年８月９日

４．調査面積　524㎡

５．調査委託者　株式会社大進建設

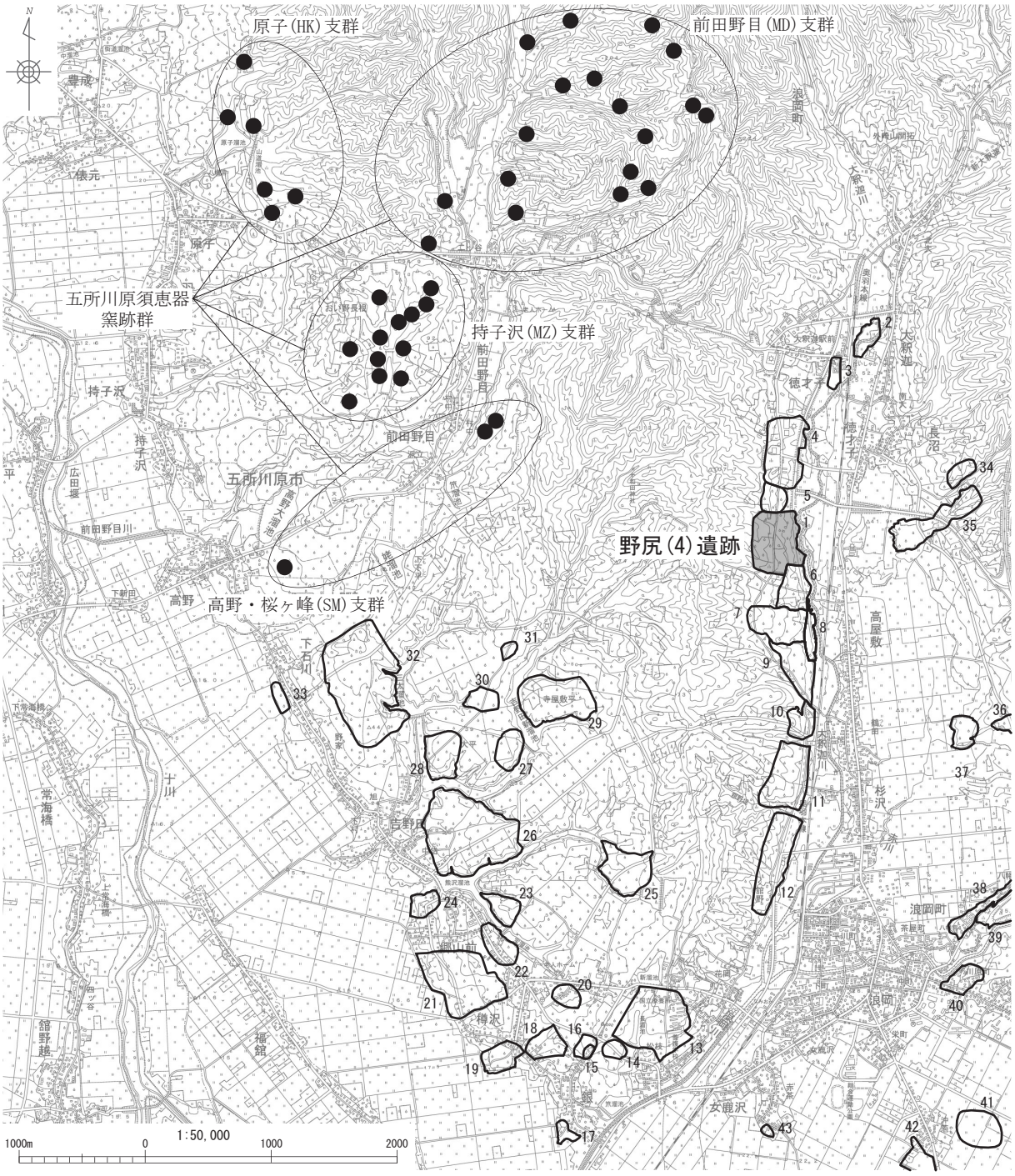
６．調査受託者　青森市

７．調査担当機関　青森市教育委員会事務局文化財課

８．調査指導機関　青森県教育庁文化財保護課

９．調 査 体 制　調査事務局　青森市教育委員会

教育長	角田詮二郎	文化財主事	小野　貴之
教育部長	古山　善猛	〃	児玉　大成（調整担当）
次長	相馬　政美	〃	設楽　政健（調査担当）
参事・文化財課長事務取扱	遠藤　正夫	主事	吹田　夕貴（庶務担当）
主幹	藤村　和人	〃	竹ヶ原亜希
文化財主査	木村　淳一	埋蔵文化財調査員	野坂　知広



第１図　遺跡の位置 ※４頁参照

第１表　周辺の遺跡

番号	遺跡番号	遺跡名	種別	時代
1	29063	野尻(4)遺跡	集落跡	平安
2	29048	大釈迦館遺跡	城館跡	中世
3	29001	早稲田館遺跡	散布地	平安
4	29049	山本遺跡	集落跡	平安
5	29060	野尻(1)遺跡	集落跡	平安、縄文
6	29061	野尻(2)遺跡	集落跡	平安
7	29062	野尻(3)遺跡	集落跡	平安、中世
8	29003	高屋敷館遺跡	集落跡	平安
9	29054	山元(1)遺跡	集落跡	平安、縄文
10	29055	山元(2)遺跡	集落跡	
11	29064	杉沢山元(4)遺跡	散布地	中世
12	29056	山元(3)遺跡	集落跡	平安、縄文
13	29014	長溜池遺跡	散布地	縄文、平安
14	29058	杉田遺跡	散布地	平安
15	29051	銀館	城館跡	中世
16	29015	大林遺跡	散布地	平安
17	29084	銀前田遺跡	散布地	平安
18	29012	神明宮遺跡	集落跡	平安、縄文
19	29013	山神宮遺跡	散布地	縄文
20	29085	樽沢村元遺跡	散布地	縄文、平安
21	29071	郷山前村元遺跡	散布地	平安
22	29011	上野遺跡	散布地	縄文、平安
23	29009	熊沢溜池遺跡	散布地	平安
24	29010	永原遺跡	散布地	縄文
25	29070	樽沢上野遺跡	散布地	縄文、平安
26	29007	中平遺跡	散布地	縄文、平安
27	29005	旭(1)遺跡	散布地	平安
28	29008	浪岡蛍沢遺跡	散布地	縄文
29	29059	寺屋敷平遺跡	散布地	平安
30	29006	旭(2)遺跡	散布地	平安
31	29004	下下平遺跡	散布地	平安
32	29072	下石川平野遺跡	散布地	縄文、平安
33	29087	岡田遺跡	散布地	平安
34	29002	大堤沢遺跡	散布地	縄文、平安
35	29067	板橋野山遺跡	散布地	平安
36	29065	小板橋溜池東遺跡	散布地	縄文
37	29066	小板橋溜池西遺跡	散布地	平安
38	29073	浪岡城遺跡	城館跡	中世、平安
39	29020	浪岡城跡	城館跡	中世
40	29050	川原館	城館跡	中世
41	29022	沖林遺跡	散布地	平安
42	29083	女鹿沢遺跡	散布地	平安
43	29088	西増田遺跡	散布地	縄文、平安

第３節　調査方法

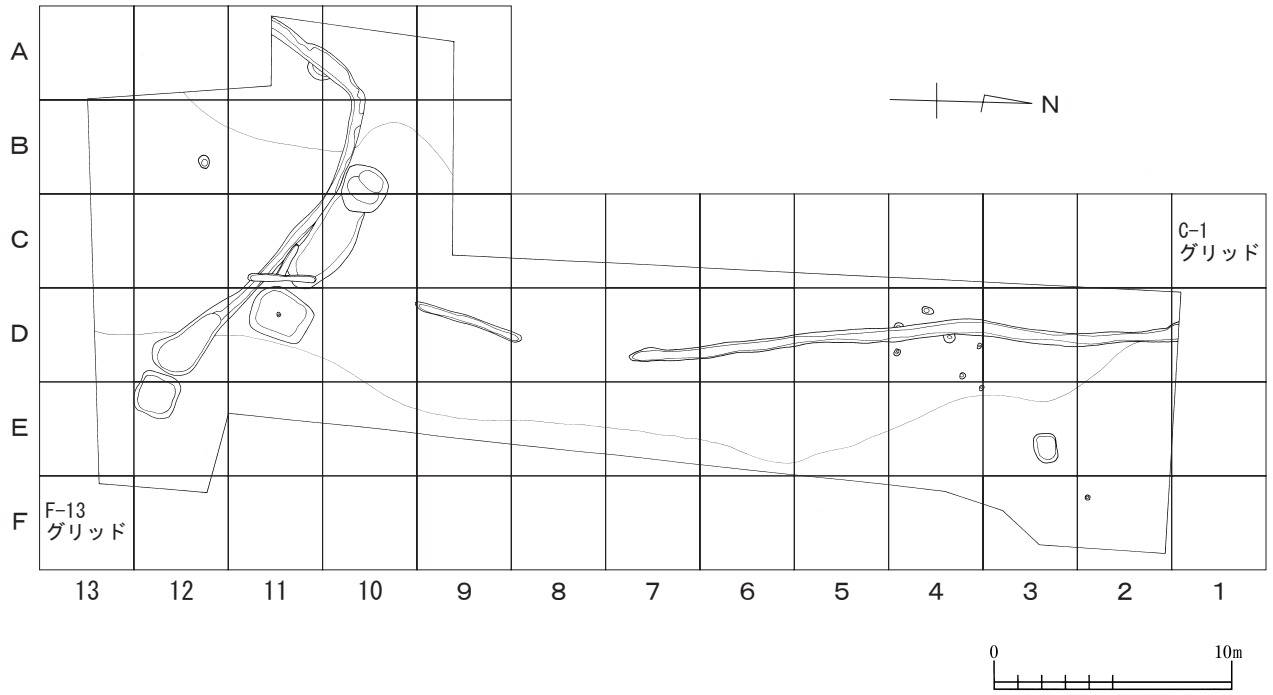
調査区は遺跡範囲内の北側にあたり、ほぼ南北に細長い形状を呈している。グリッドは公共座標に基づいた任意の起点から、調査区全体が網羅されるように４×４ｍで設定した（第２図）。グリッドの呼称は、東側に向かってＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄ・・・の順にアルファベット、南側に向かって１、２、３、４・・・の順に算用数字を付し、両者の組み合わせで示した。測量原点は、付近に適当な基準点が存在しなかったため、旧国道７号線沿いの水準点（標高38.09m）より移動を行った。

発掘調査は、前年度および今年度の確認調査における遺構確認面（地山ローム層）まで重機で慎重に表土を剥ぎ取り、確認された遺構について順次精査していく方法をとった。遺構精査は、竪穴状遺構・土坑では４分法または２分法、小ピットでは２分法を用いて、溝状遺構では任意に層序観察ベルトを設定して断面図を作成した。平面図は簡易遣り方測量とトータルステーションを併用して作成し、縮尺は原則として20分の１とした。写真は遺構確認状況、土層断面、完掘状況、遺物出土状況を主に撮影し、デジタルカメラを使用した。

第４節　調査経過

平成19年７月12日、発掘調査開始。重機による遺構確認面までの掘削を行い、その後、鋤簾がけにより遺構確認を行った。その結果、竪穴状遺構２基・土坑５基・小ピット９基・溝状遺構４条を検出し、調査区北側から順に遺構精査を実施した。８月９日に全ての作業を終了し、機材・プレハブ等を撤収した。

（設楽　政健）



第２図　グリッド設定図

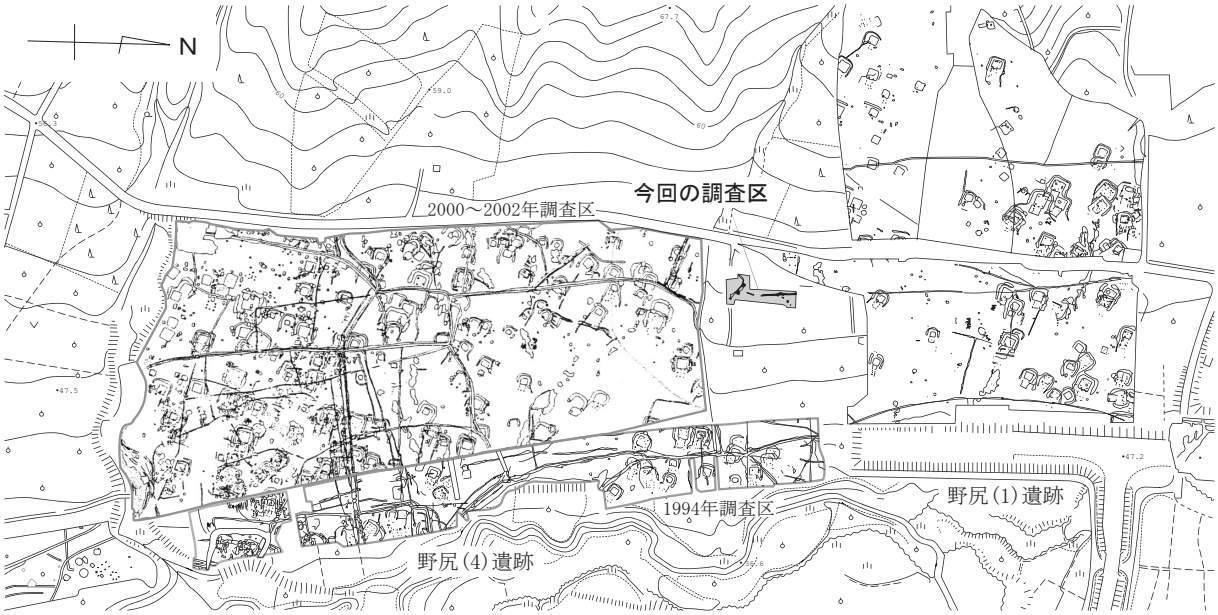
第Ⅱ章　遺跡の環境

第１節　過去の調査

野尻（4）遺跡は、青森県青森市浪岡大字徳才子字山本地内に位置し、大釈迦川右岸の低位段丘上、標高50m内外の緩斜面に占地する集落遺跡である。現在、遺跡のある前田野目台地東縁は果樹園などに利用されており、大釈迦川流域の低地では水田耕作が行われている。本遺跡周辺には、北から順に山本遺跡、野尻（1）遺跡、本遺跡、野尻（2）遺跡、野尻（3）遺跡、高屋敷館遺跡、山元（1）遺跡、山元（2）遺跡と、ほぼ同時期の集落遺跡が集中している。また、前田野目台地西縁には五所川原須恵器窯跡群（９世紀後半～10世紀後半）が分布し、本遺跡を含む集落遺跡群にも主体的に須恵器を供給していたものと推定されている（第１図参照）。

本遺跡においては平成６年（1994）に、国道７号浪岡バイパス建設に伴い、青森県教育委員会により発掘調査が実施され、縄文時代の土坑１基、溝状ピット（Ｔピット）４基、平安時代の外周溝を伴う建物跡41軒、掘立柱建物跡11棟、土坑86基、溝跡108跡、その他の遺構７基が検出された（青森県教育委員会1995ａ）。特に、集落全体を区切るように配置された区画溝と外周溝を伴う建物跡は特徴的である。調査区南側には幅４m内外の環濠を巡らす区域もあり、その性格・機能が注目されている。

平成12年から14年（2000～2002）にかけても、浪岡町大釈迦第３工業団地造成に伴い、旧浪岡町土地開発公社の委託を受けた大釈迦工業団地調査会により発掘調査が行われた（浪岡町教育委員会2004）。調査区域は約50,000㎡という広範囲に及び、平安時代の外周溝を伴う建物跡278軒、掘立柱建物跡３棟、竪穴状遺構32基、土坑1071基、井戸跡15基、耕作跡14基、焼土跡117基、小ピット562基、溝跡189条、円形周溝遺構２基、埋設土器２基、炉跡状遺構１基、縄文時代の陥穴土坑（Ｔピット）３基が検出された。これらの調査により、本遺跡が９世紀後半～10世紀後半の約100年間にわたって継続された集落跡であることが推定された。



（Ｓ＝１：5,000）

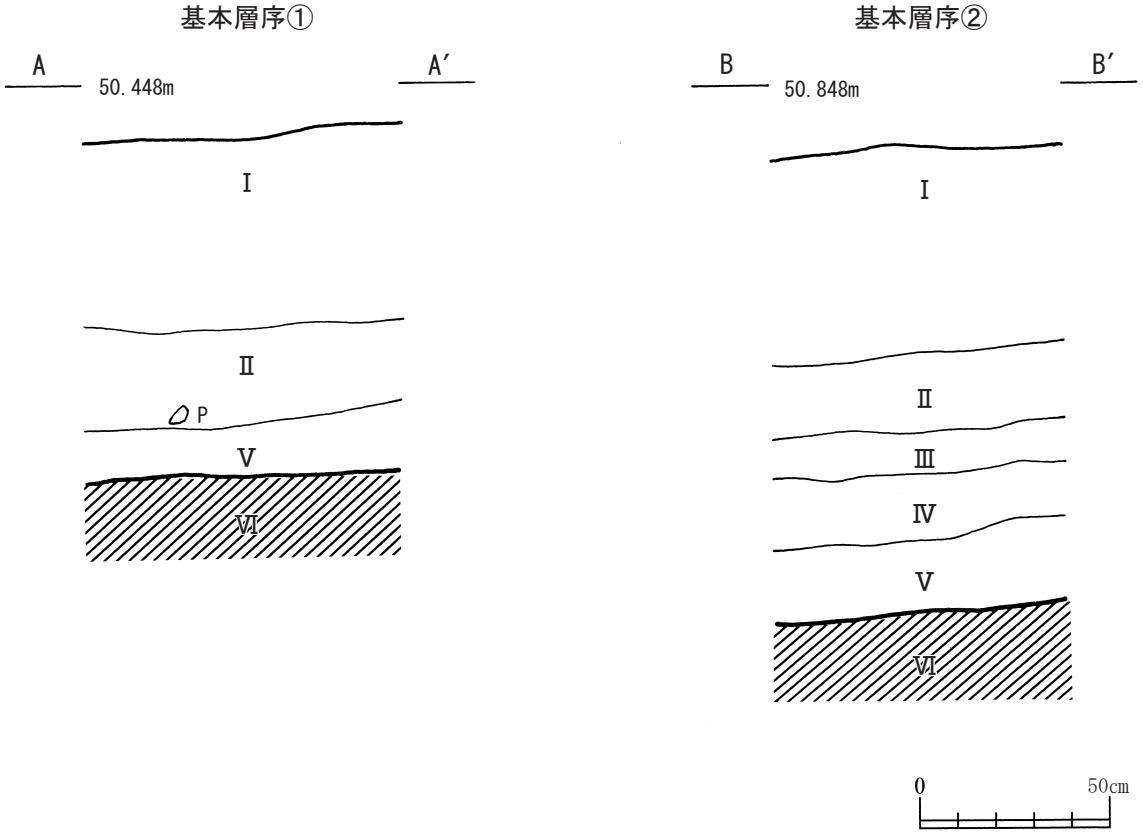
第３図　過去の調査区

第２節　基本層序

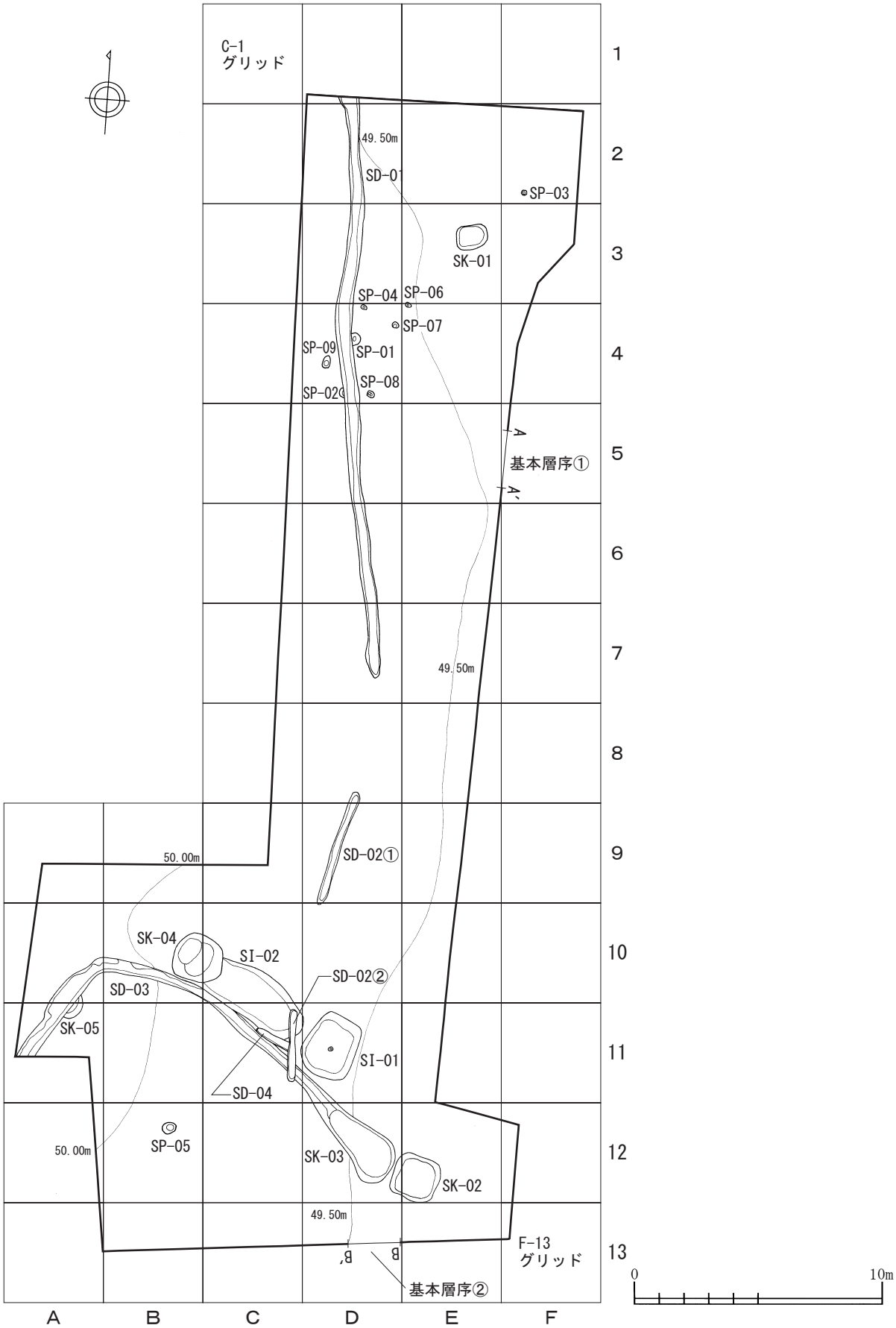
基本層序は、調査区東壁（F-5グリッド）と南壁（D-13グリッド）の２ヶ所で観察し、おおむね６層に分層された。表土（Ⅰ層）には現代の盛土である砂利・シラス層が厚く堆積しており、本来の自然表土はⅡ層に相当するものと思われる。表土剥ぎの段階で、地山ローム（Ⅵ層）まで掘り下げてしまったため、遺構確認面はⅥ層上面ということになるが、実際の遺構面はⅤ層にあったと推定される。平成12年～14年にかけて実施された大釈迦工業団地調査会の調査（浪岡町教育委員会2004）における基本層序Ⅰ層が本調査区Ⅱ層、Ⅱａ層がⅢ層、Ⅱｂ層がⅣ層、Ⅱｃ層がⅤ層、Ⅲ層がⅥ層にそれぞれ対応する可能性が高いが、場所によって土色には濃淡がある。

（野坂　知広）

Ⅰ層：明黄褐色土（10YR7/6）　表土砂利・シラス層
Ⅱ層：黒　色　土（10YR2/1）　砂利少量
Ⅲ層：黒 褐 色 土（10YR2/3）　パミス微量
Ⅳ層：黒 褐 色 土（10YR3/2）　ローム粒（径３～４㎜）微量
Ⅴ層：黒　色　土（10YR1.7/1）　ローム粒（径３～４㎜）微量、土師器混在
Ⅵ層：褐　色　土（10YR4/4）　地山ローム層（黄褐色に濃淡あり）



第４図　基本層序 ※第５図に対応


C-1
グリッド
49.50m
SD-01
SP-03
SK-01
SP-04
SP-06
SP-07
SP-09
SP-01
SP-08
SP-02
A
基本層序①
A'
49.50m
SD-02①
50.00m
SK-04
SI-02
SD-02②
SD-03
SK-05
SI-01
SD-04
50.00m
SP-05
SK-03
SK-02
49.50m
B'
B
F-13
グリッド
基本層序②
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
A
B
C
D
E
F
0
10m

第5図　遺構配置図

第Ⅲ章　検出遺構と出土遺物

本調査において検出された遺構は、竪穴状遺構２基、土坑５基、小ピット９基、溝状遺構４条であった。以下、遺構毎に詳細を記すが、各遺構の帰属時期、すなわち出土遺物の所産時期は、過去の調査において示された年代観を参考に、主に土師器坏の底部・体部形態によって比定した。ロクロ成形で底部に回転糸切痕を持つものが主流であり、おおむね器高に対して底径の大きなものを古相（９世紀後葉～末葉)、器高に対して底径が小さく底部から体部に向かって明瞭なくびれを持つものを新相（10世紀初頭～前葉）と捉えた。

東北北部における平安時代の土器編年は、いわゆる桜井第二形式（櫻井清彦1958）を土台として、その変遷案・細分案が提示されており、近年は、さらに詳細な編年網の構築が期待されている。特に、遺跡数が急増する９世紀後半～10世紀前半は、五所川原須恵器の生産期間とも合致しており、本遺跡の主体時期に重なると思われる。

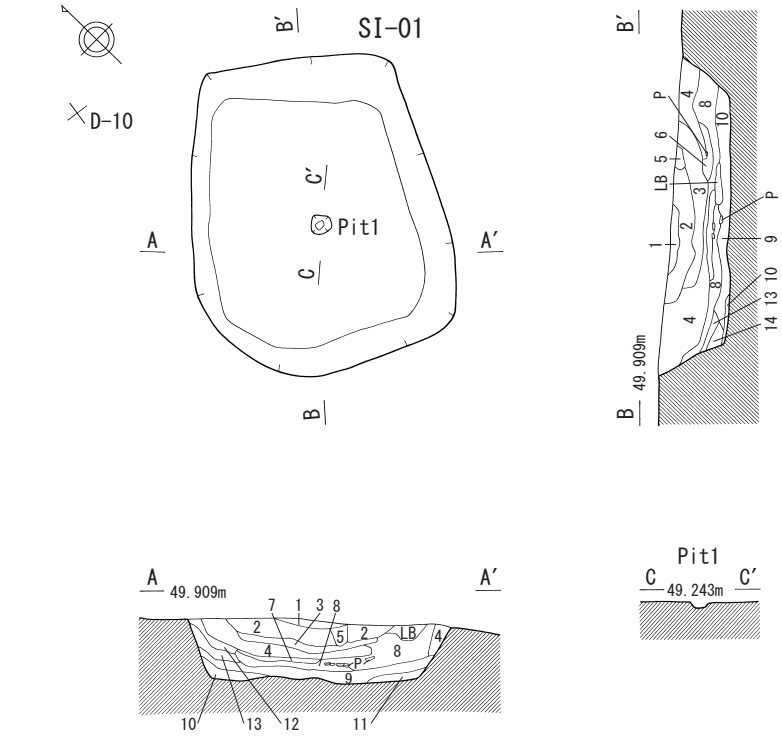
第１節　竪穴状遺構（ＳＩ）

第１号竪穴状遺構・SI－01（第６図）

Ｄ－11グリッドに位置している。平面形は隅丸方形を呈しており、規模は長軸220㎝×短軸190㎝×深さ51㎝を測る。確認面にはB-Tm火山灰が層状に確認できた。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、壁溝は確認できなかった。壁高は東壁43㎝、西壁47㎝、南壁53㎝、北壁40㎝を測る。底面はやや起伏が見られ、底面中央よりやや東側から長軸18㎝×短軸17㎝×深さ７㎝のピット（Pit１）を検出した。堆積土は14層に分層した。黒褐色・暗褐色を主体とする土層が堆積している。堆積土中にはローム粒・ロームブロックが混入している。遺物は、土師器坏３点（第７図１・３・４)、土師器甕６点（第７図６～10、第８図２)、須恵器坏３点（第７図２・５、第８図１）が出土した。土師器坏のうち１点は内面黒色処理が施されており（第７図４)、須恵器坏の１点には「V」字状の刻書がある（第７図５)。本遺構の帰属時期は、出土土器・降下火山灰から９世紀後葉～10世紀初頭と考えられる。

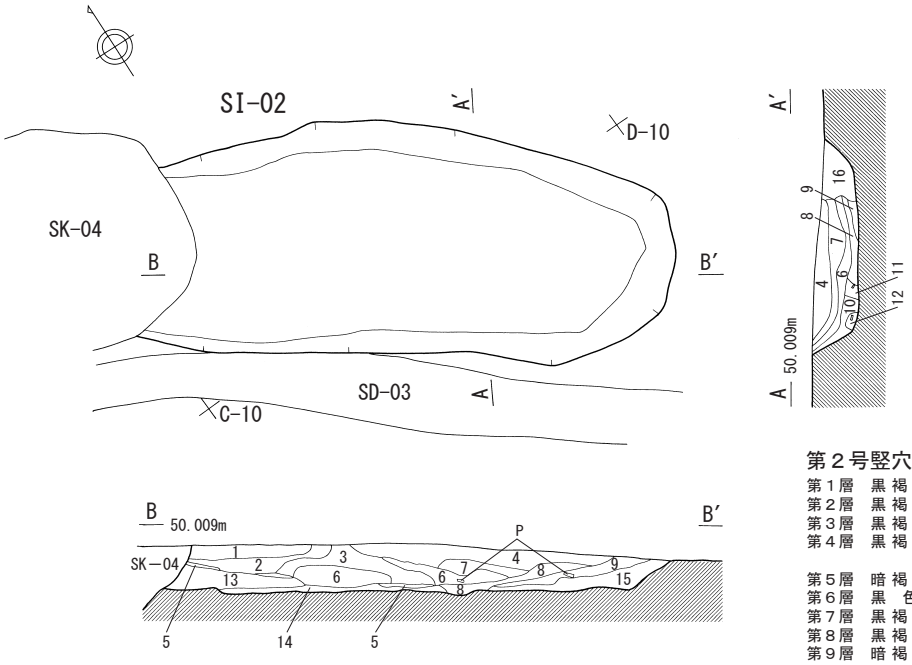
第２号竪穴状遺構・SI－02（第６図）

Ｃ－10・11グリッドに位置している。ＳＫ－04・ＳＤ－02②・ＳＤ－03・ＳＤ－04と重複しており、全て本遺構が古い。平面形は長楕円形を呈しており、規模は長軸420㎝×短軸170㎝×深さ23㎝を測る。壁面はゆるやかな傾斜で立ち上がる部分とほぼ垂直に立ち上がる部分が見られ、壁溝は確認できなかった。壁高は東壁26㎝、南壁35㎝、北壁25㎝を測る。西壁はSK－04によって切られているため不明である。底面はほぼ平坦である。堆積土は16層に分層した。黒褐色・黒色を主体とする土層が堆積している。堆積土中にはロームブロックやローム粒・炭化粒が混入している。遺物は、土師器坏５点（第９図１～４・７)、土師器甕10点（第８図７～９・11、第９図５・６・８～11)、須恵器坏２点（第８図６・10)、須恵器壺１点（第８図５)、須恵器甕２点（第８図３・４）が出土した。土師器坏のうち１点は内面黒色処理が施されており（第９図３)、土師器甕のうち１点はロクロ成形である（第９図５)。本遺構の帰属時期は、出土土器から９世紀後葉～10世紀初頭と考えられる。



第１号竪穴状遺構（SI－01）

第１層	浅黄橙色土（10YR8/4）	B-Tm層、黒色土混在
第２層	黒褐色土（10YR3/2）	ロームブロック微量、ローム粒少量
第３層	黒褐色土（10YR3/2）	ロームブロック微量、ローム粒中量
第４層	黒褐色土（10YR2/2）	ロームブロック少量、パミス微量
第５層	暗褐色土（10YR3/3）	ローム粒少量、パミス微量
第６層	にぶい黄褐色土（10YR4/3）	ロームブロック少量、パミス微量
第７層	黒褐色土（10YR3/1）	ローム粒中量、遺物混在
第８層	黒褐色土（10YR2/2）	ローム粒微量
第９層	暗褐色土（10YR3/4）	ロームブロック中量、ローム粒中量
第10層	にぶい黄褐色土（10YR4/3）	ロームブロック多量
第11層	褐色土（10YR4/6）	砂質ローム主体
第12層	黒褐色土（10YR2/3）	ロームブロック少量、ローム粒微量
第13層	黒褐色土（10YR3/1）	炭化物微量、ロームブロック微量
第14層	黒褐色土（10YR3/2）	ロームブロック微量、パミス少量

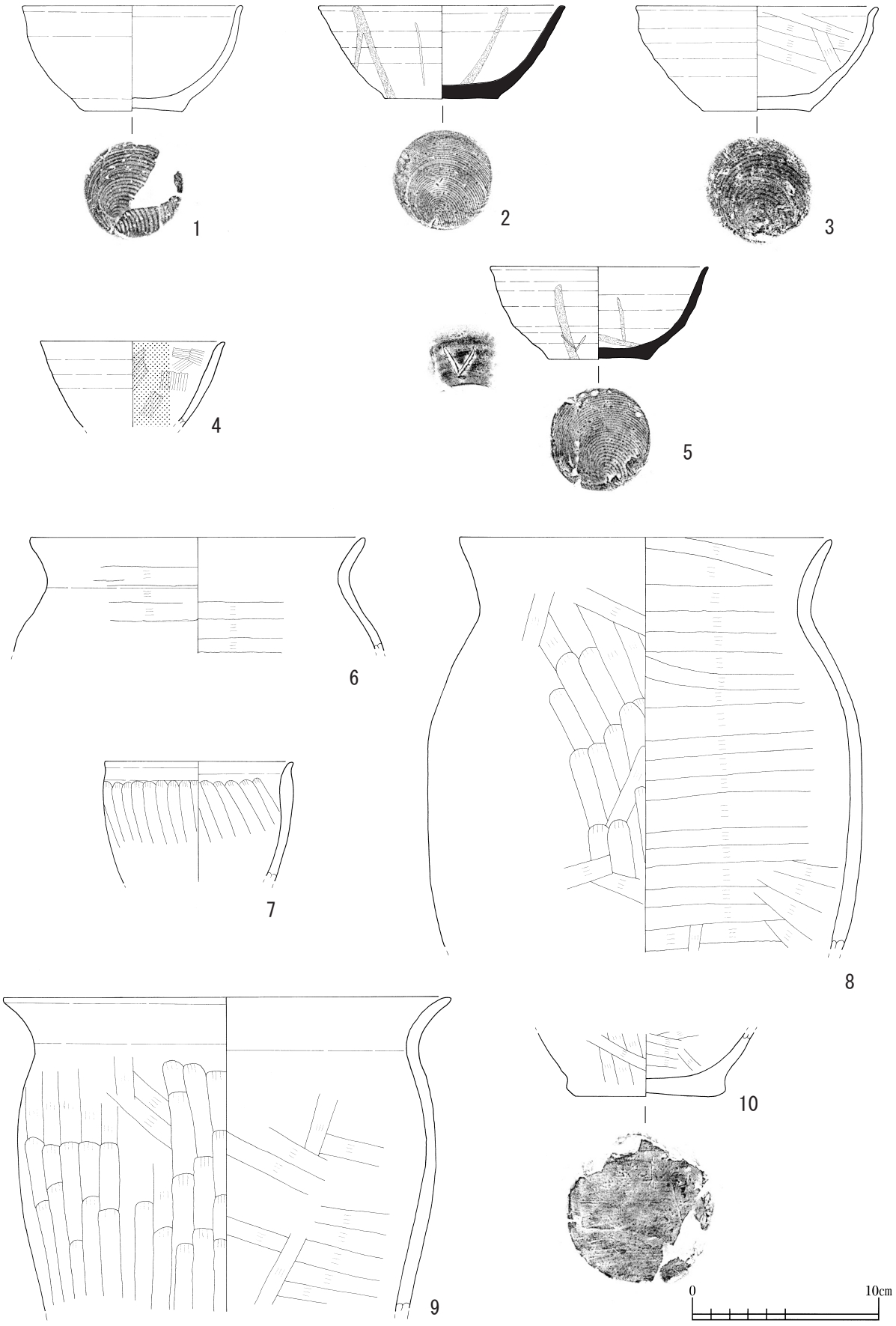


第２号竪穴状遺構（SI－02）

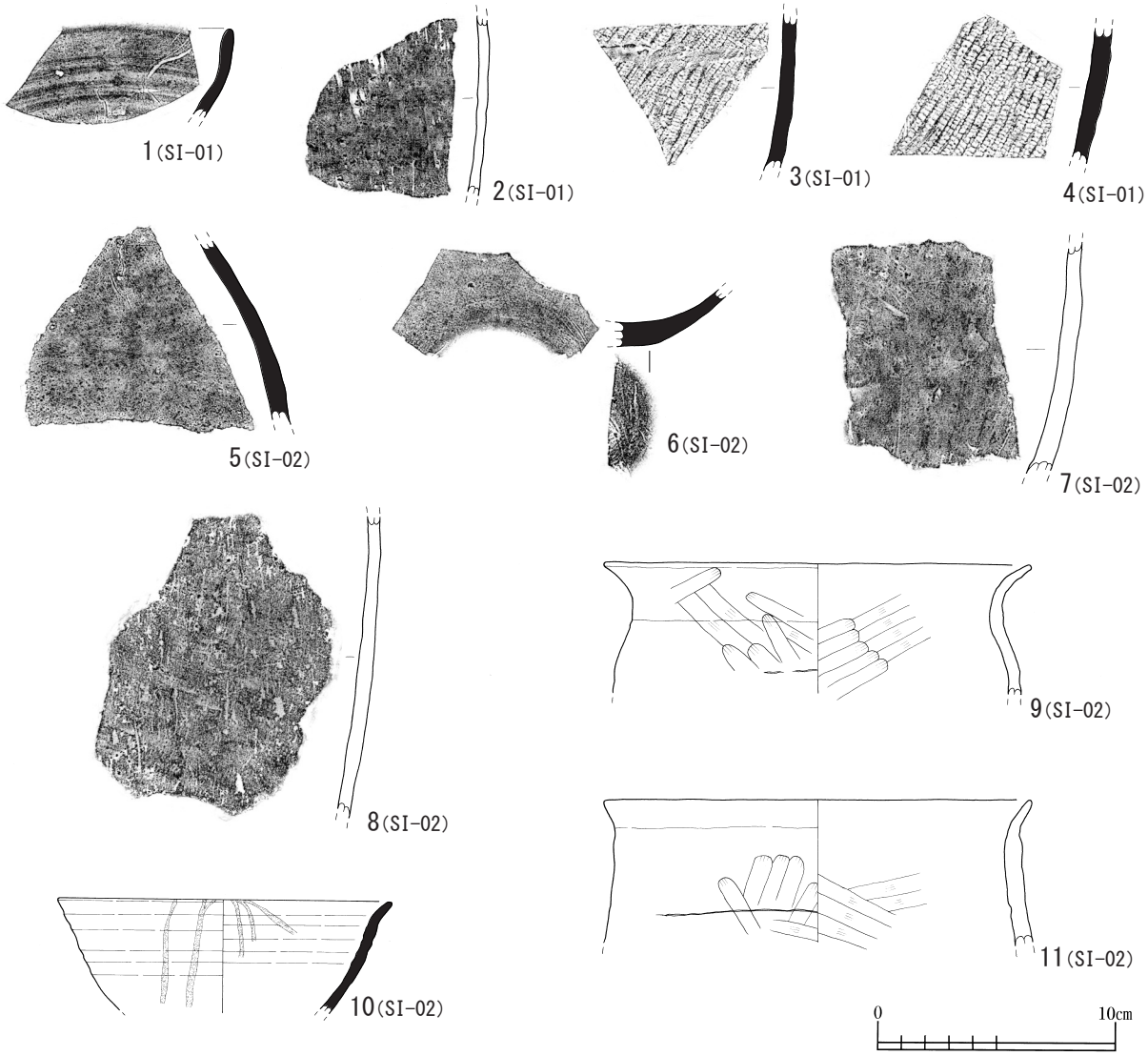
第１層	黒褐色土（10YR2/2）	ロームブロック中量
第２層	黒褐色土（10YR3/2）	ロームブロック少量
第３層	黒褐色土（10YR2/3）	ロームブロック少量
第４層	黒褐色土（10YR2/3）	ロームブロック微量、パミス少量
第５層	暗褐色土（10YR3/4）	パミス微量
第６層	黒　色　土（10YR2/1）	ロームブロック少量
第７層	黒褐色土（10YR2/2）	ローム粒少量、炭化物微量
第８層	黒褐色土（10YR2/2）	粘土質
第９層	暗褐色土（10YR3/3）	焼土粒少量、炭化物少量、ローム粒少量
第10層	黒　色　土（10YR2/1）	ロームブロック少量
第11層	黒褐色土（10YR2/2）	粘土質
第12層	黒　色　土（10YR1.7/1）	焼土粒微量、ローム粒微量
第13層	にぶい黄橙色土（10YR7/3）	ローム主体
第14層	にぶい黄褐色土（10YR4/3）	ロームブロック混在
第15層	暗褐色土（10YR3/3）	ローム粒少量、炭化物少量
第16層	にぶい黄橙色土（10YR7/3）	砂利層

0　2m

第６図　竪穴状遺構



第７図　SI－01出土土器



第８図　SI－01・02出土土器

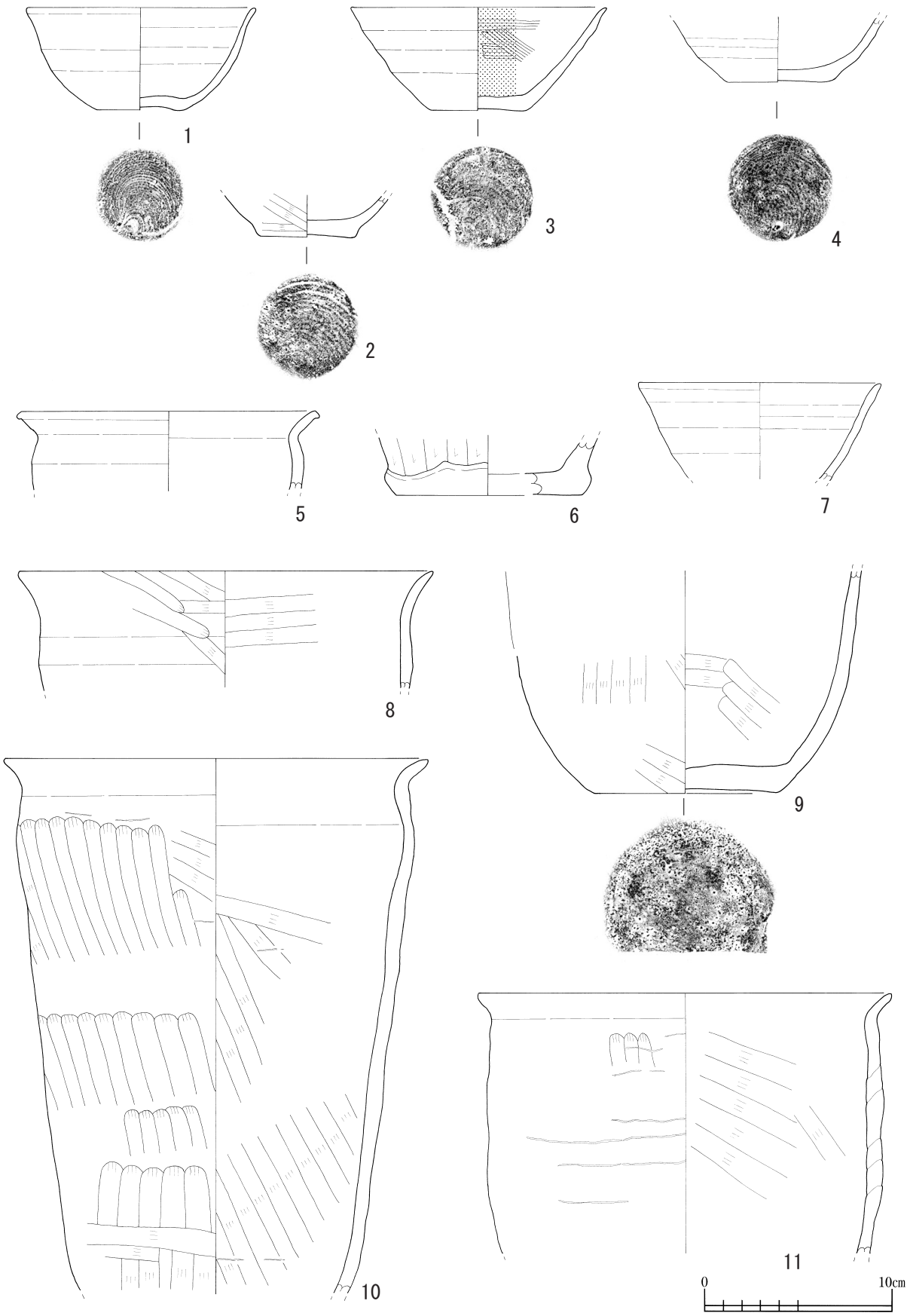
第２節　土坑（ＳＫ）

第１号土坑・SK－01（第10図）

Ｅ－３グリッドに位置している。平面形は隅丸方形を呈しており、規模は長軸116cm×短軸100cm×深さ18cmを測る。壁面はゆるやかに立ち上がり、底面にはやや起伏が見られる。堆積土は４層に分層した。黒褐色を主体とする土層が堆積しており、ローム粒・ロームブロックが混入している。遺物は、土師器甕２点（第12図１・２）が出土した。第12図１は土師器壷の可能性があり、第12図２の底部内面には製作者の爪痕、あるいは調整工具と思しき痕跡が二ヶ所観察される。

第２号土坑・SK－02（第10図）

Ｄ・Ｅ－12グリッドに位置している。平面形は隅丸方形を呈しており、規模は長軸183cm×短軸181cm×深さ34cmを測る。壁面はゆるやかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は３層に分層した。黒褐色を主体とする土層が堆積しており、焼土粒・炭化物・ロームブロックが混入している。遺物は、土師器甕



第９図　SI－02出土土器

２点（第12図３・４）が出土した。

第３号土坑・SK－03（第10図）

Ｄ－12グリッドに位置している。ＳＤ－03と重複しており、本遺構が新しい。平面形は不整形を呈しており、規模は長軸330㎝×短軸180㎝×深さ30㎝を測る。壁面はゆるやかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。堆積土は７層に分層した。黒褐色土を主体とする土層が堆積しており、焼土粒・ローム粒・ロームブロックが混入している。遺物は、土師器坏の底部破片１点（第12図５）と須恵器長頸壺の口頸部破片１点（第12図６）が出土した。須恵器長頸壺口頸部には「𠂉」と刻書が施されている。

第４号土坑・SK－04（第10図）

Ｂ・Ｃ－10グリッドに位置している。ＳＩ－02と重複しており、本遺構が新しい。平面形は不整円形を呈しており、規模は長軸201㎝×短軸183㎝×深さ73㎝を測る。壁面は東壁のみゆるやかに立ち上がり、他はほぼ垂直に立ち上がる。底面には部分的に起伏が見られる。堆積土は13層に分層した。黒褐色・黒色を主体とする土層が堆積しており、ローム粒・ロームブロックが混入している。遺物は、土師器坏１点（第12図９）と土師器甕２点（第12図７・８）、須恵器甕６点（第11図１～６）が出土した。

第５号土坑・SK－05（第10図）

Ａ－10・11グリッドに位置している。ＳＤ－03と重複しており、本遺構が古い。平面形はＳＤ－03に切られているため全容は不明であるが、楕円形と考えられる。残存部分の規模は、長軸103㎝×短軸47㎝×深さ17㎝を測る。壁面はゆるやかに立ち上がり、底面は丸みを帯びている。堆積土は１層である。砂利を多量に含む暗褐色土が堆積している。遺物は出土しなかった。

（設楽　政健）

第３節　小ピット（ＳＰ）

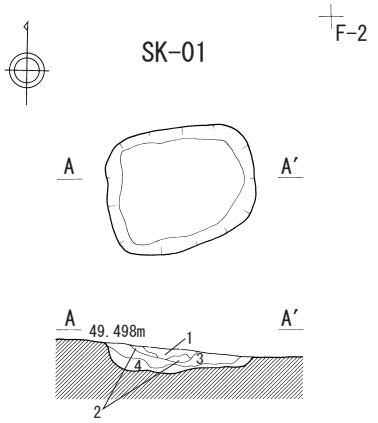
本調査においては柱穴状の小ピットを９基検出した。特に、SP－01・02・04・06～09は一区域に集中しており、掘立柱建物跡など何らかの構造物の痕跡とも考えられたが、明確な配列は確認されなかった。

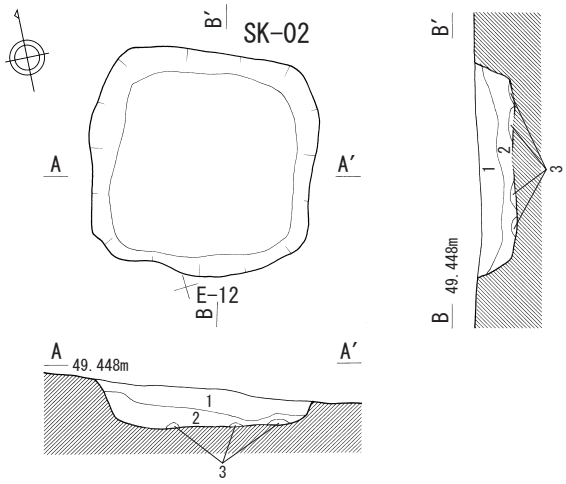
第１号小ピット・SP－01（第15図）

Ｄ－４グリッドに位置する。SD－01に切られているが、平面形はおおむね隅丸方形を呈すものと思われる。長軸36㎝×短軸31㎝×深さ16㎝を測り、壁面は急角度に立ち上がる。出土遺物はなく、その帰属時期は不明である。

第２号小ピット・SP－01（第15図）

Ｄ－４グリッドに位置する。SD－01に切られているが、平面形は隅丸方形を呈す。長軸31㎝×短軸20㎝×深さ16㎝を測り、壁面は急角度に立ち上がる。出土遺物はなく、帰属時期はSP－01同様、不明である。



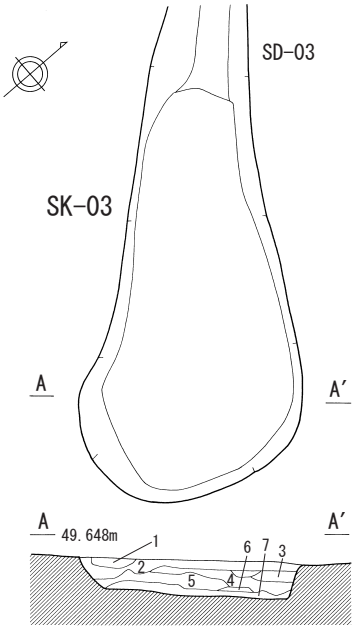


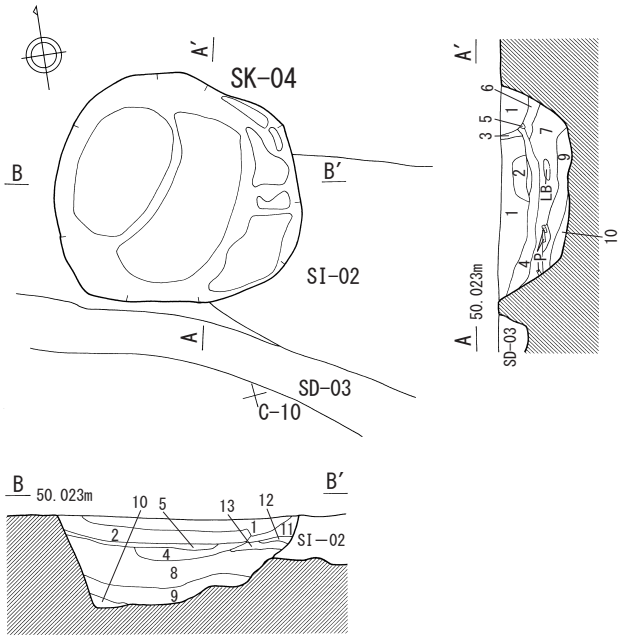
第１号土坑（SK－01）

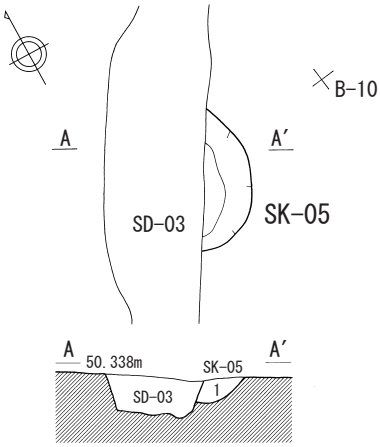
第１層　褐 色 土（10YR4/4）　砂質ローム主体、土師器混在
第２層　黒褐色土（10YR2/3）　ローム粒微量
第３層　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒微量
第４層　黒褐色土（10YR3/1）　ロームブロック多量

第２号土坑（SK－02）

第１層　黒 褐 色 土（10YR2/2）　焼土粒微量、炭化物少量、ロームブロック中量、ローム粒中量
第２層　黒 褐 色 土（10YR3/2）　焼土粒極微量、ローム粒中量
第３層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　ロームブロック中量







第３号土坑（SK－03）

第１層　黒 褐 色 土（10YR2/3）　炭化物微量、ロームブロック少量
第２層　黒 褐 色 土（10YR3/1）　焼土粒少量、ローム粒少量
第３層　黒 褐 色 土（10YR2/2）　ローム粒少量
第４層　黒 褐 色 土（10YR3/2）　ローム粒微量
第５層　黒　色　土（10YR2/1）　ロームブロック極微量、ローム粒少量
第６層　暗 褐 色 土（10YR3/3）　炭化物微量、ロームブロック少量、ローム粒少量
第７層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　ロームブロック中量、ローム粒中量

第５号土坑（SK－05）

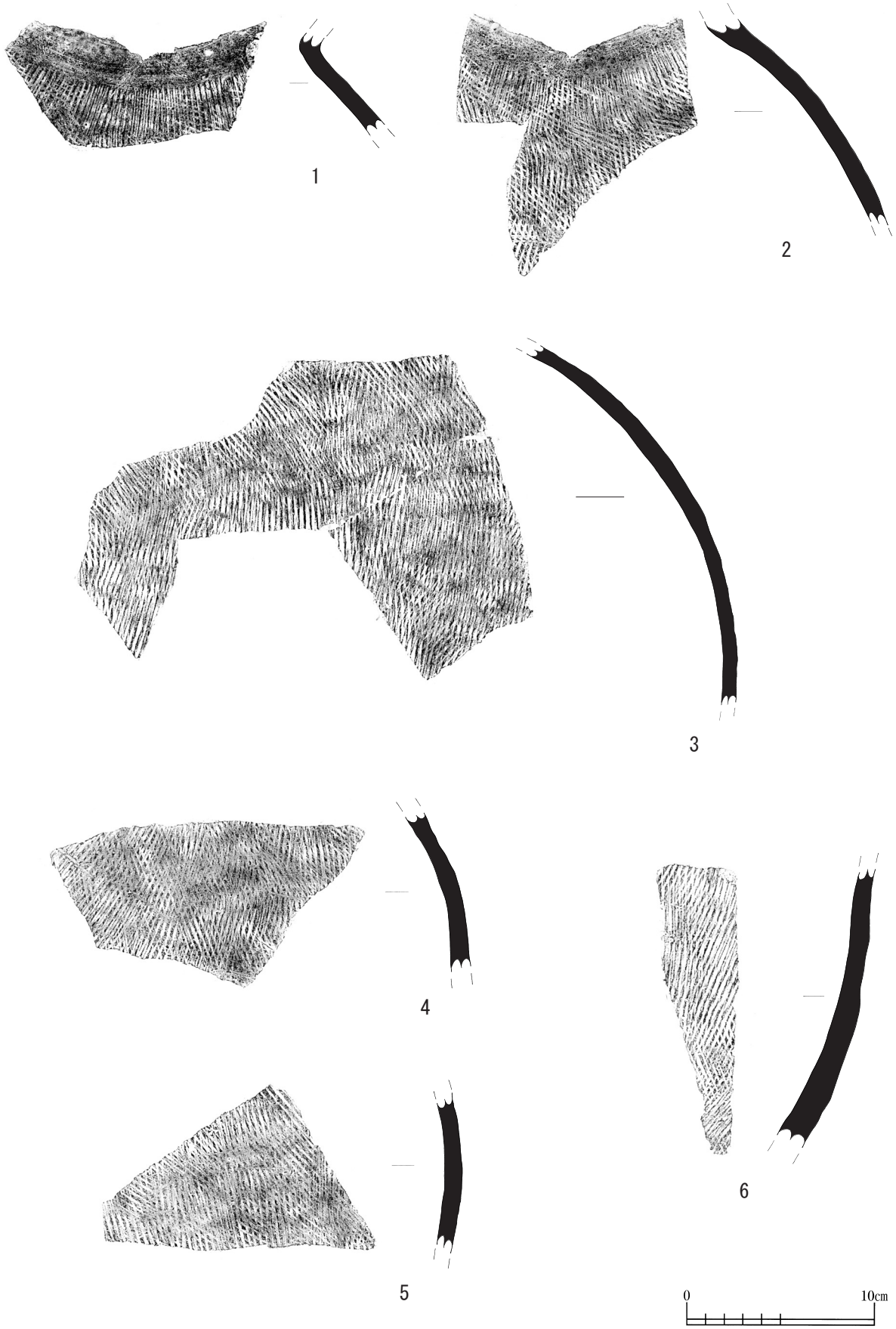
第１層　暗褐色土（10YR3/3）　砂利層

第４号土坑（SK－04）

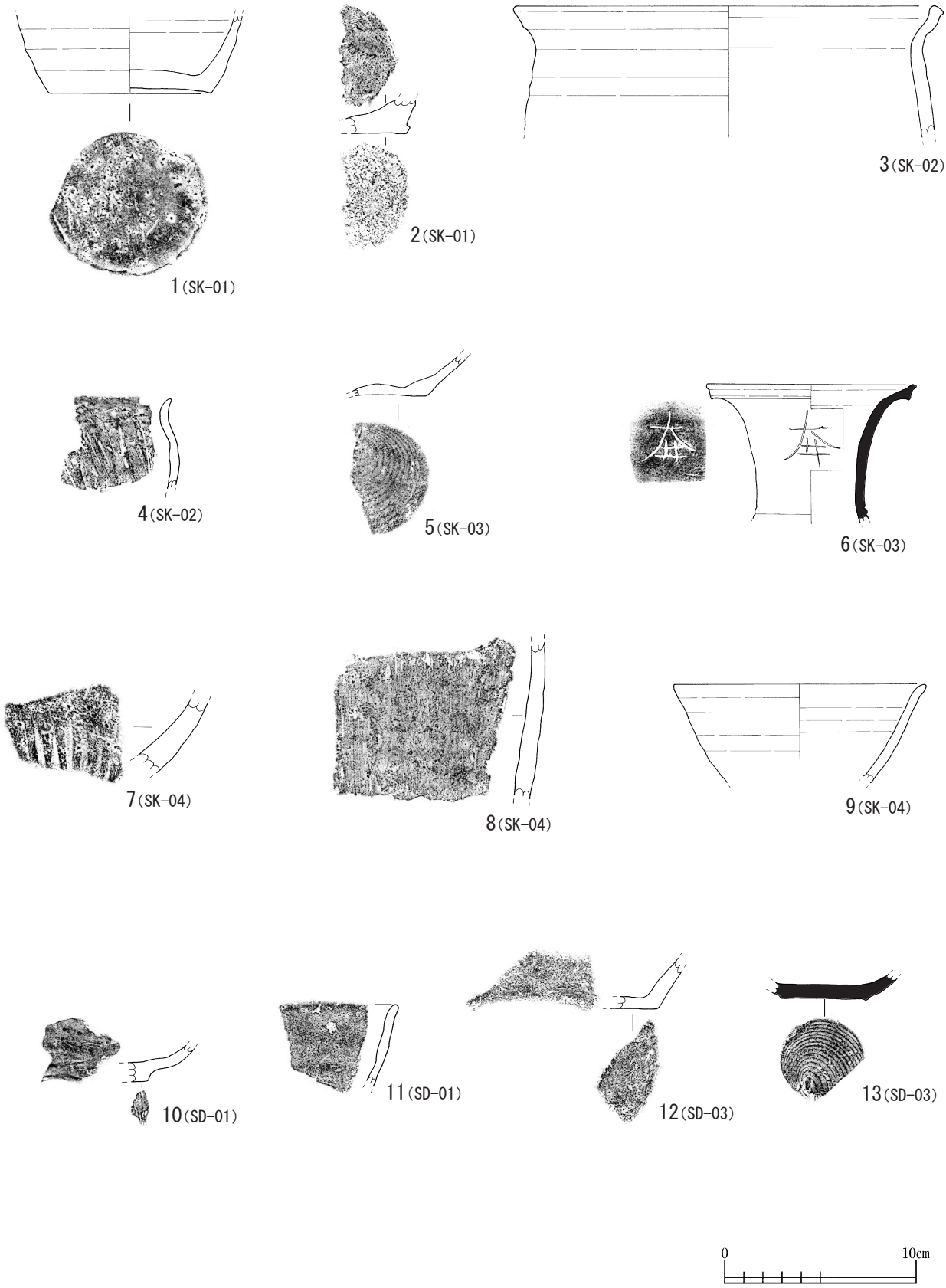
第１層　黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒少量
第２層　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒少量、バミス少量
第３層　黒 色 土（10YR2/1）　ローム粒微量、バミス微量
第４層　黒褐色土（10YR2/2）　バミス少量
第５層　褐 色 土（7.5YR4/6）　バミス微量
第６層　黒 色 土（10YR2/1）　ローム粒微量、バミス微量
第７層　黒 色 土（10YR1.7/1）　バミス微量
第８層　褐 色 土（10YR4/4）　ロームブロック主体
第９層　黒褐色土（10YR3/2）　ロームブロック多量
第10層　黒褐色土（10YR3/2）　ロームブロック中量
第11層　黒褐色土（10YR3/1）　ローム粒少量、バミス少量
第12層　黒褐色土（10YR3/2）　ローム粒少量、バミス少量
第13層　暗褐色土（10YR3/4）　バミス微量

0　2m

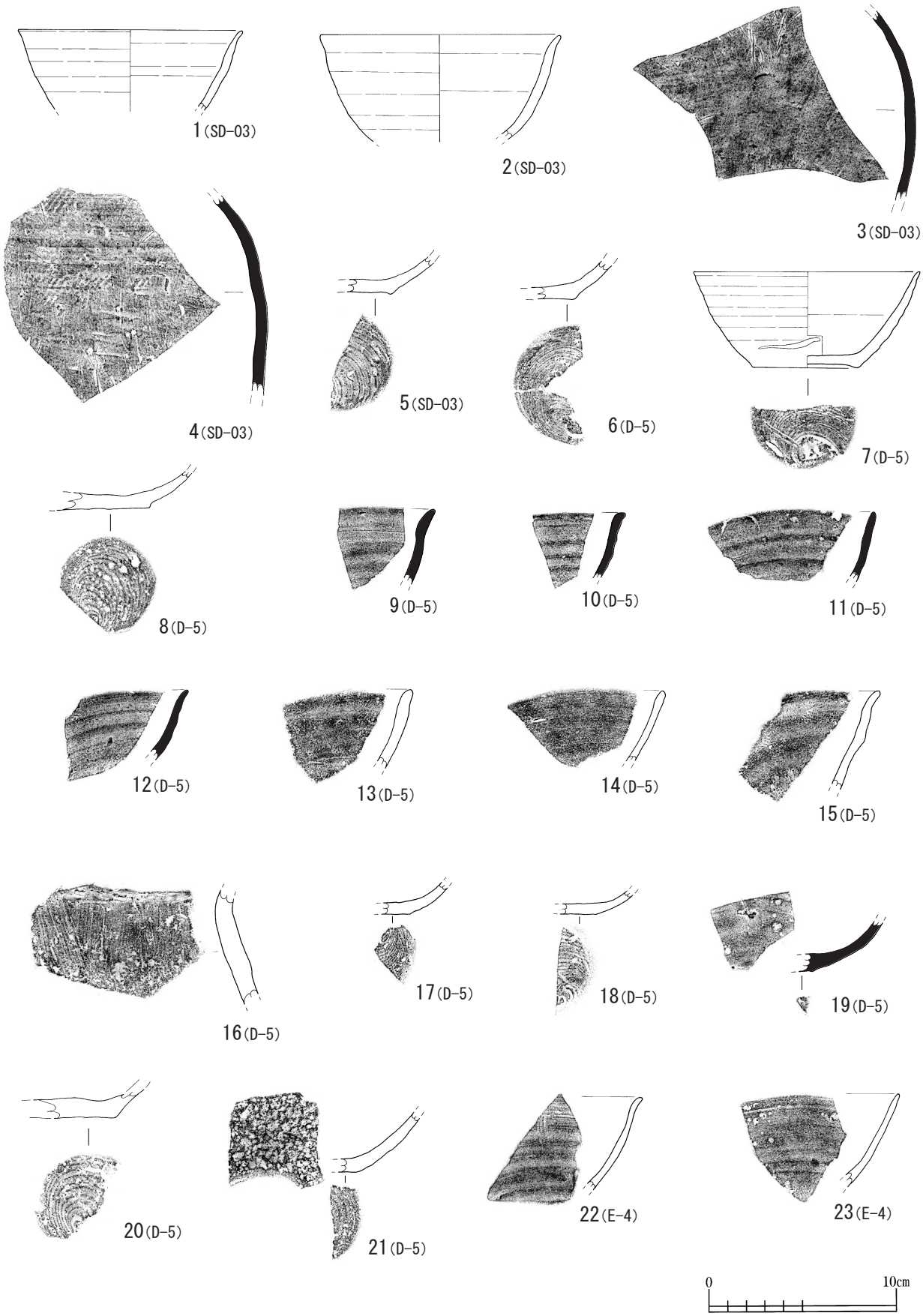
第10図　土坑



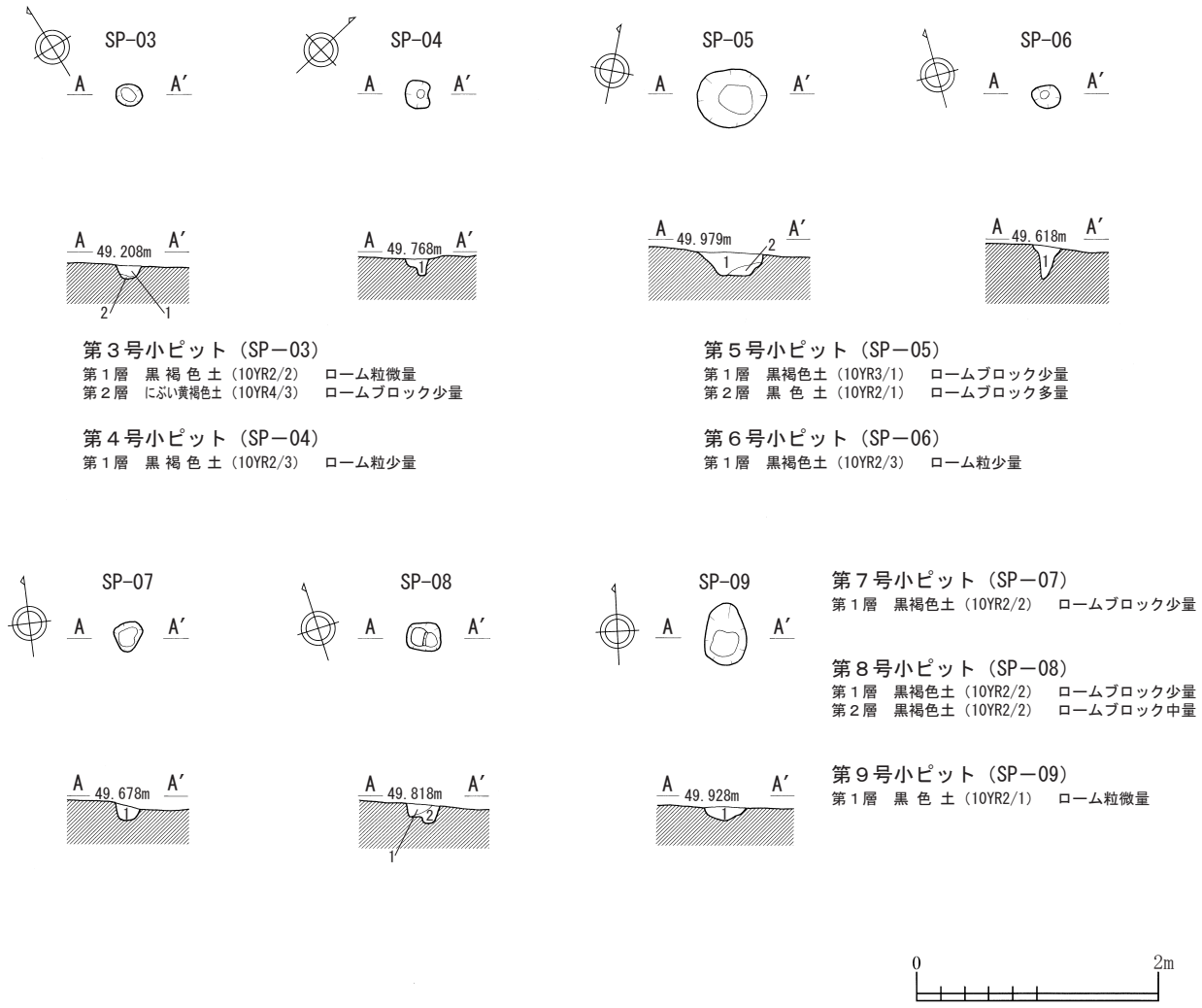
第11図　SK－04出土土器



第12図　SK・SD出土土器



第13図　SD・遺構外出土土器



第14図　小ピット

第３号小ピット・SP－03（第14図）

Ｆ－２グリッドに位置し、平面形はおおむね楕円形を呈す。長軸22cm×短軸18cm×深さ11cmを測り、壁面は急角度に立ち上がる。出土遺物はなく、その帰属時期は不明である。

第４号小ピット・SP－04（第14図）

Ｄ－４グリッドに位置し、平面形は不整形を呈す。長軸22cm×短軸19cm×深さ13cmを測り、壁面は二段となる。出土遺物はなく、その帰属時期は不明である。

第５号小ピット・SP－05（第14図）

Ｂ－12グリッドに位置し、平面形はおおむね楕円形を呈す。長軸57cm×短軸49cm×深さ19cmを測り、壁面はややゆるやかに立ち上がる。出土遺物はなく、その帰属時期は不明である。SD－03に囲まれたような場所にあるため、外周溝を伴う建物跡に関するピットかとも思われたが、周囲に遺構プランは確認されず、詳細は不明である。

第６号小ピット・SP－06（第14図）

Ｅ－４グリッドに位置し、平面形は不整円形を呈す。長軸22㎝×短軸18㎝×深さ26㎝を測り、壁面は急角度に立ち上がる。出土遺物はなく、その帰属時期は不明である。

第７号小ピット・SP－07（第14図）

Ｄ－４グリッドに位置し、平面形は不整形を呈す。長軸24㎝×短軸20㎝×深さ12㎝を測り、壁面は急角度に立ち上がる。出土遺物はなく、その帰属時期は不明である。

第８号小ピット・SP－08（第14図）

Ｄ－４グリッドに位置し、平面形は隅丸長方形を呈す。長軸30㎝×短軸22㎝×深さ15㎝を測り、壁面は二段となる。出土遺物はなく、その帰属時期は不明である。

第９号小ピット・SP－09（第14図）

Ｄ－４グリッドに位置し、平面形は不整長楕円形を呈す。長軸51㎝×短軸35㎝×深さ11㎝を測り、壁面はゆるやかに立ち上がる。出土遺物はなく、その帰属時期は不明である。

第４節　溝状遺構（ＳＤ）

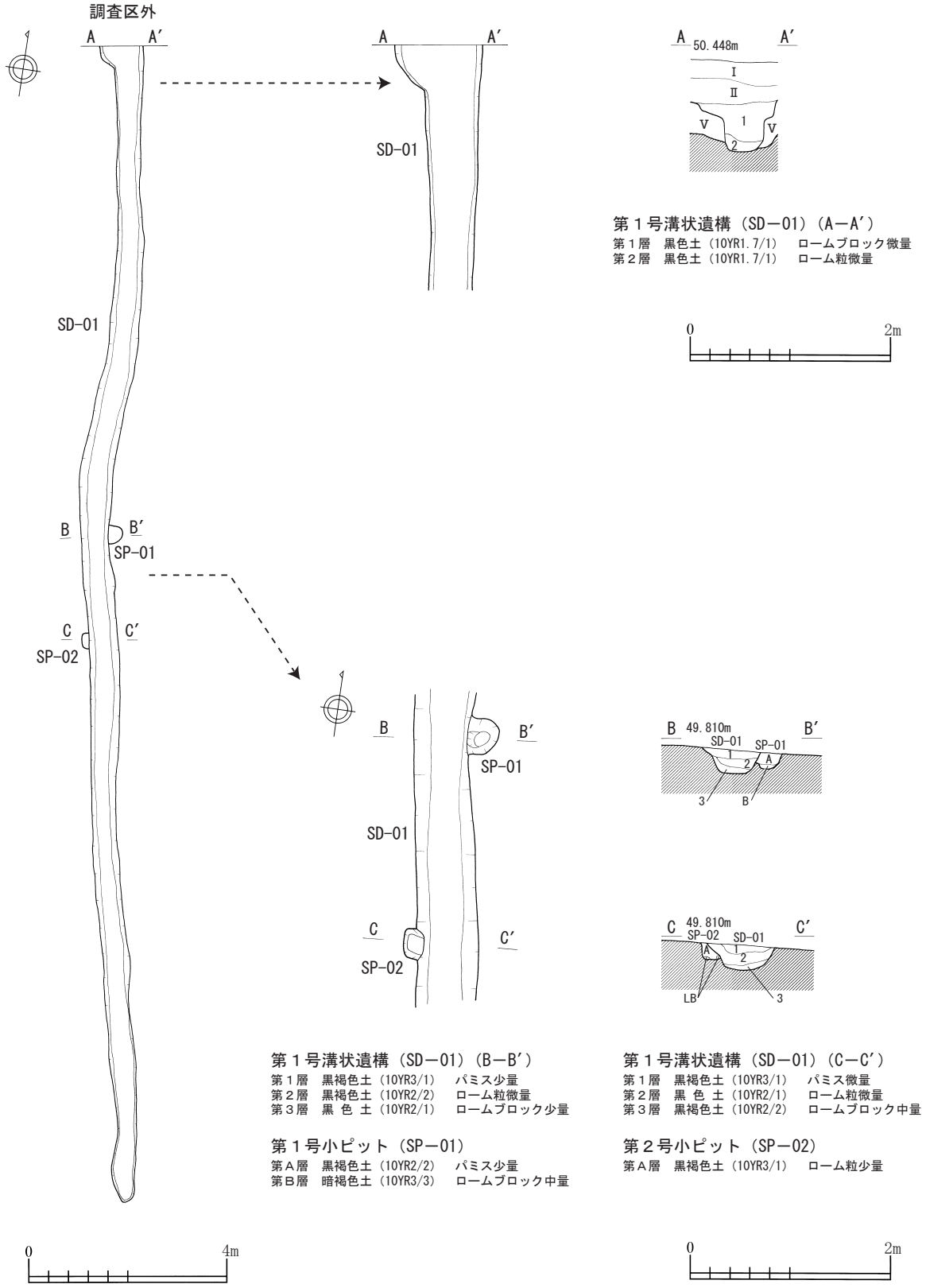
第１号溝状遺構・SD－01（第15図）

Ｄ－１～７グリッドに位置する。わずかに蛇行しながら南北方向に延びている。全長23.2m×幅0.6m×深さ0.25mを測り、調査区北壁の層序観察によれば、本来の深さは0.5m程度であった可能性がある。基本層序Ⅱ層の下面から掘り込まれており、その帰属時期は、堆積土中に流れ込んだ土器片（第13図５・６）よりも新しく、おおむね10世紀前葉以降と想定されよう。SP－01・SP－02をともに切っており、壁面はやや急角度に立ち上がる。また、図面上には表現できていないが、平面形には微細な凹凸があり、構築時の痕跡と考えられる（写真４参照）。本遺構とSD－02は同一遺構と思われ、断絶しているのは表土剥ぎの段階で削平されたためであろう。

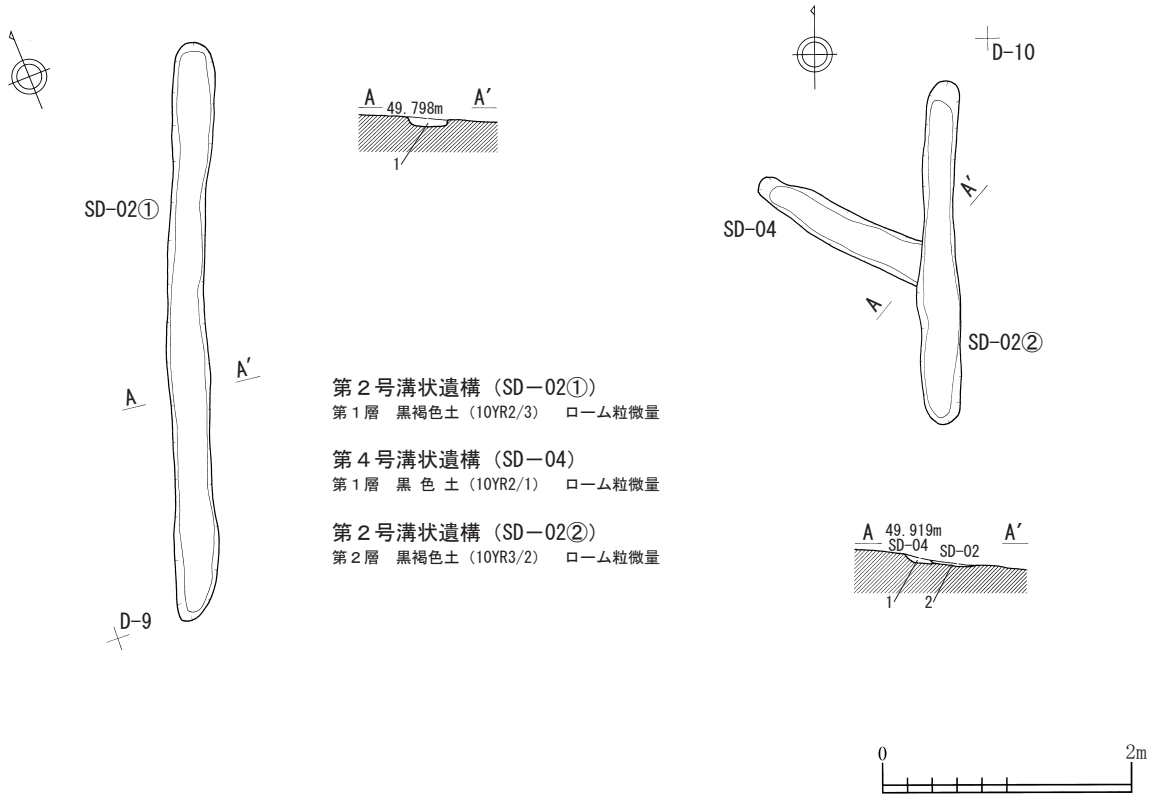
なお、本遺構は、1996年度に行われた野尻（１）遺跡の調査で検出された第２号溝跡（青森県教育委員会1998）と2000年～2002年度調査の本遺跡（浪岡町教育委員会2004）における第７号溝跡の中間に位置し、両溝跡と同一遺構である可能性が高い（第３図参照）。

第２号溝状遺構・SD－02（第16図）

SD－02①はＤ－８・９グリッド、SD－02②はＣ－11グリッドに位置するが、SD－01とともに連続する同一遺構と思われ、南北に向かってSD－01の延長線上に延びている。SD－02①は全長4.56m×幅0.36m×深さ0.07m、SD－02②は全長2.76m×幅0.35m×深さ0.03mを測り、壁面はゆるやかに立ち上がる。SD－02②はSD－04を切っているようにも見えるが、残存部分があまりに少ないため詳細は不明である。帰属時期は、SD－01と同じ10世紀前葉以降と推定されよう。


調査区外
A
A′
SD-01
B
B′
SP-01
C
C′
SP-02
50.448m
Ⅰ
Ⅱ
Ⅴ
1
2
第１号溝状遺構（SD－01）（A－A′）
第１層　黒色土（10YR1.7/1）　ロームブロック微量
第２層　黒色土（10YR1.7/1）　ローム粒微量
0
2m
49.810m
3
LB
第１号溝状遺構（SD－01）（B－B′）
第１層　黒褐色土（10YR3/1）　パミス少量
第２層　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒微量
第３層　黒 色 土（10YR2/1）　ロームブロック少量
第１号小ピット（SP－01）
第Ａ層　黒褐色土（10YR2/2）　パミス少量
第Ｂ層　暗褐色土（10YR3/3）　ロームブロック中量
第１号溝状遺構（SD－01）（C－C′）
第１層　黒褐色土（10YR3/1）　パミス微量
第２層　黒 色 土（10YR2/1）　ローム粒微量
第３層　黒褐色土（10YR2/2）　ロームブロック中量
第２号小ピット（SP－02）
第Ａ層　黒褐色土（10YR3/1）　ローム粒少量
0
4m

第15図　溝状遺構（１）



第16図　溝状遺構（２）

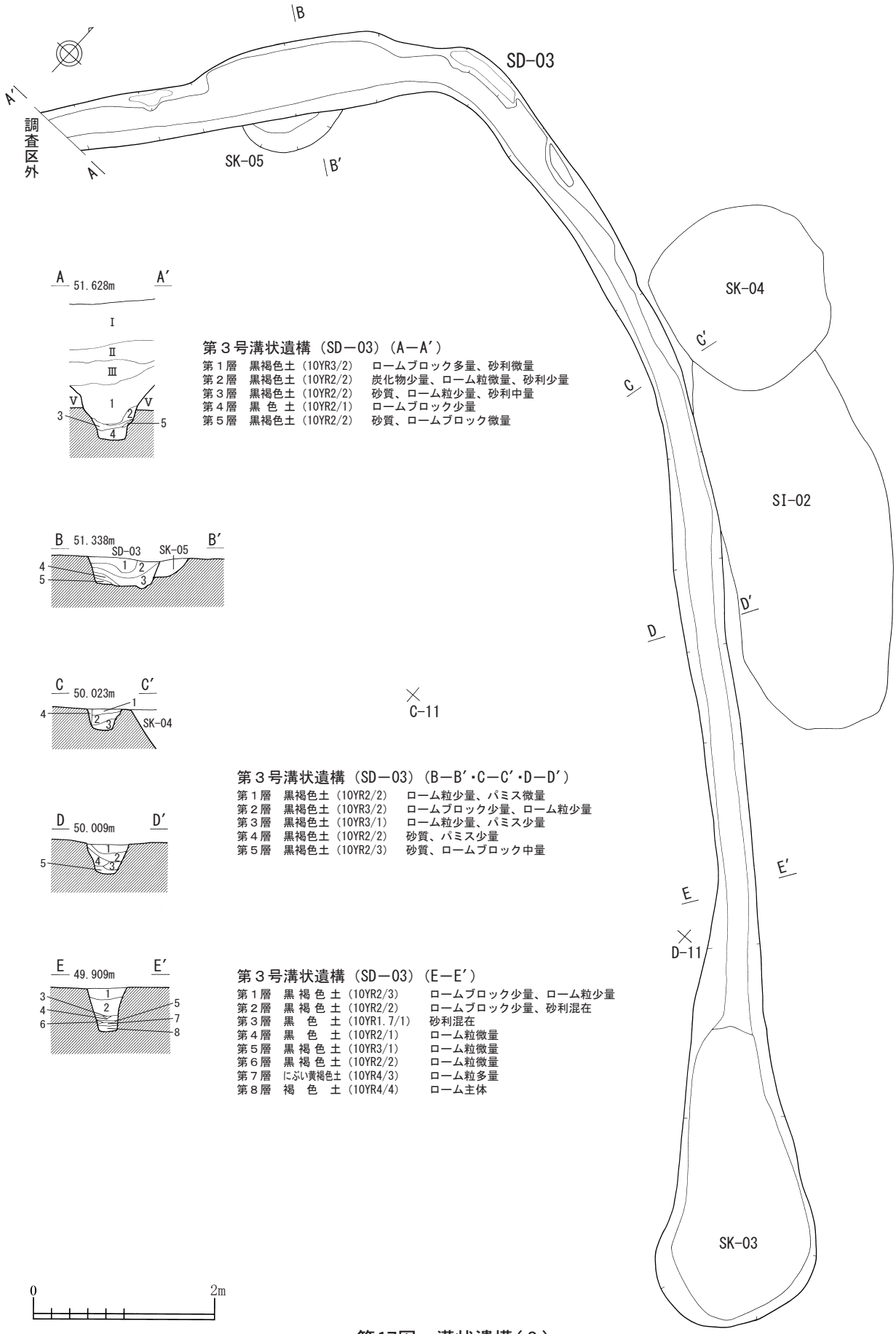
第３号溝状遺構・SD－03（第17図）

Ａ・Ｂ・Ｃ－10、Ｃ・Ｄ－11、Ｄ－12グリッドに位置する。Ａ－10グリッドで大きく東南方向へ屈曲し、SK－03に収束されるような平面形を呈する。全長約19m×幅0.45m×深さ0.6mを測り、屈曲部からSK－03までは約14mである。Ａ－10グリッド付近のみ幅が0.8mまで拡張されている。調査区西側から東側に向かっては約80㎝の比高差があり、水路とすれば理に適っているようにも見えるが、SK－03に収束してしまうことを勘案すると通有の溝状遺構とは思われない。

過去の調査において多く検出されている外周溝とすれば、形態・方位ともに合致するが、規模が若干大きめであること、外周溝内側に竪穴住居跡や掘立柱建物跡の痕跡が皆無であることなど、外周溝と判断してしまうには困難な部分もある。ここでは外周溝の可能性を指摘するにとどめるが、本来の遺構面が本遺跡における遺構確認面である地山ローム（Ⅵ層）よりも上位にあったことを踏まえると、竪穴住居跡は削平され、掘立柱建物跡は調査区外に位置しているとも考えられよう。

出土遺物は、土師器坏が３点（第13図１・２・５）、土師器甕が１点（第12図12）、須恵器坏が１点（第12図13）、須恵器壺が２点（第13図３・４）あるが、その様相は周辺遺構と大きな相違はない。

しかし、遺物の出土層位は確認面や覆土上位が主体であり、流れ込みの結果と見れば、遺物の年代がそのまま遺構の年代になるとも限らない。本遺構はSI－02・SK－05を切るように構築されており、周辺遺構よりは若干新しいものと思われ、外周溝を伴う建物跡は過去の調査（浪岡町教育委員会2004）において９世紀末葉～10世紀初頭、隣接する野尻（３）遺跡（青森県教育委員会2006）では10世紀中葉～後葉という年代観が示されている。明確に遺構に伴う遺物がないため詳細は不明であるが、ここでは10世紀初頭～前葉の



第３号溝状遺構（SD－03）（A－A′）

第１層　黒褐色土（10YR3/2）　ロームブロック多量、砂利微量
第２層　黒褐色土（10YR2/2）　炭化物少量、ローム粒微量、砂利少量
第３層　黒褐色土（10YR2/2）　砂質、ローム粒少量、砂利中量
第４層　黒 色 土（10YR2/1）　ロームブロック少量
第５層　黒褐色土（10YR2/2）　砂質、ロームブロック微量

第３号溝状遺構（SD－03）（B－B′・C－C′・D－D′）

第１層　黒褐色土（10YR2/2）　ローム粒少量、パミス微量
第２層　黒褐色土（10YR3/2）　ロームブロック少量、ローム粒少量
第３層　黒褐色土（10YR3/1）　ローム粒少量、パミス少量
第４層　黒褐色土（10YR2/2）　砂質、パミス少量
第５層　黒褐色土（10YR2/3）　砂質、ロームブロック中量

第３号溝状遺構（SD－03）（E－E′）

第１層　黒 褐 色 土（10YR2/3）　ロームブロック少量、ローム粒少量
第２層　黒 褐 色 土（10YR2/2）　ロームブロック少量、砂利混在
第３層　黒　色　土（10YR1.7/1）　砂利混在
第４層　黒　色　土（10YR2/1）　ローム粒微量
第５層　黒 褐 色 土（10YR3/1）　ローム粒微量
第６層　黒 褐 色 土（10YR2/2）　ローム粒微量
第７層　にぶい黄褐色土（10YR4/3）　ローム粒多量
第８層　褐　色　土（10YR4/4）　ローム主体

第17図　溝状遺構（３）

帰属時期を推定しておきたい。

第４号溝状遺構・SD－04（第16図）

Ｃ－11グリッドに位置し、東西に向かって延びている。全長1.14m×幅0.33m×深さ0.04mを測り、壁面はゆるやかに立ち上がる。出土遺物はないが、その帰属時期は隣接するSD－02と大きな相違はないものと思われる。

第５節　遺構外出土遺物

Ｃ・Ｄ－５グリッドに風倒木痕があり、窪みに溜まるように土器が集中して出土した。図示した16点の土師器・須恵器（第13図６～21）は、かかる箇所からまとまって出土した一括遺物である。第13図７は土師器坏であり、体部断面形は丸みを帯びながら若干急角度で立ち上がる。底径は少し広く、底部には右回転の回転糸切痕が観察される。第13図６・８・17・18・20・21も土師器坏の底部であり、右回転の回転糸切痕が観察される。第13図９～12・19は須恵器坏であり、土師器坏と形態的に類似している。周辺のＥ－４・５グリッドからも土師器坏が１点ずつ出土しており（第13図22・23）、Ｄ－５グリッドの一括遺物と同様の年代観が推定される。その所産時期は、ともに10世紀初頭～前葉に比定されよう。

（野坂　知広）

第２表　出土遺物観察一覧

図版番号	器種	出土位置	計測値(cm)			外面調整	内面調整	底部調整	時期	備考
			口径	底径	器高					
第７図１	土師器坏	SI－01	11.8	5.2	5.6	ロクロ	ロクロ	回転糸切(右)	９世紀後葉～末葉	
第７図２	須恵器坏	SI－01	13.2	5.3	5.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切(右)	９世紀後葉～末葉	火ダスキ痕
第７図３	土師器坏	SI－01	12.9	5.7	5.6	ロクロ	ヘラナデ	回転糸切(右)	９世紀後葉～末葉	
第７図４	土師器坏	SI－01	9.9	－	－	ロクロ	ヘラミガキ	－	９世紀後葉～末葉	内面黒色処理
第７図５	須恵器坏	SI－01	11.6	－	5.0	ロクロ	ロクロ	回転糸切(右)	９世紀後葉～末葉	火ダスキ痕、刻書
第７図６	土師器甕	SI－01	17.8	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	
第７図７	土師器甕	SI－01	10.1	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	
第７図８	土師器甕	SI－01	20.0	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	第７図10と同一個体か
第７図９	土師器甕	SI－01	24.1	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	
第７図10	土師器甕	SI－01	－	7.9	－	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラケズリ	９世紀後葉～10世紀前葉	第７図８と同一個体か
第８図１	須恵器坏	SI－01	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	９世紀後葉～末葉	
第８図２	土師器甕	SI－01	－	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	
第８図３	須恵器甕	SI－02	－	－	－	叩目	ナデ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	
第８図４	須恵器甕	SI－02	－	－	－	叩目	ナデ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	
第８図５	須恵器壺	SI－02	－	－	－	ヘラケズリ	ロクロ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	
第８図６	須恵器坏	SI－02	－	－	－	ヘラナデ	ロクロ	回転糸切(右)	９世紀後葉～末葉	火ダスキ痕
第８図７	土師器甕	SI－02	－	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	
第８図８	土師器甕	SI－02	－	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	
第８図９	土師器甕	SI－02	17.9	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	
第８図10	須恵器坏	SI－02	14.1	－	－	ロクロ	ロクロ	－	９世紀末葉～10世紀初頭	火ダスキ痕
第８図11	土師器甕	SI－02	17.8	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	
第９図１	土師器坏	SI－02	12.2	4.5	5.5	ロクロ	ロクロ	回転糸切(右)	９世紀後葉～末葉	
第９図２	土師器坏	SI－02	－	5.3	－	ヘラナデ	ロクロ	回転糸切(右)	９世紀後葉～末葉	
第９図３	土師器坏	SI－02	13.5	5.4	5.5	ロクロ	ヘラミガキ	回転糸切(右)	９世紀後葉～末葉	内面黒色処理
第９図４	土師器坏	SI－02	－	5.5	－	ロクロ	ロクロ	回転糸切(右)	９世紀後葉～末葉	
第９図５	土師器甕	SI－02	15.8	－	－	ロクロ	ロクロ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	
第９図６	土師器甕	SI－02	－	9.8	－	ヘラケズリ	ロクロ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	
第９図７	土師器坏	SI－02	12.9	－	－	ロクロ	ロクロ	－	９世紀後葉～末葉	
第９図８	土師器甕	SI－02	21.9	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	
第９図９	土師器甕	SI－02	－	9.2	－	ヘラナデ	ヘラナデ	砂底	９世紀後葉～10世紀前葉	
第９図10	土師器甕	SI－02	22.5	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	
第９図11	土師器甕	SI－02	22.0	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	
第11図１	須恵器甕	SK－04	－	－	－	叩目	ナデ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	同一個体か
第11図２	須恵器甕	SK－04	－	－	－	叩目	ナデ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	同一個体か
第11図３	須恵器甕	SK－04	－	－	－	叩目	ナデ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	同一個体か
第11図４	須恵器甕	SK－04	－	－	－	叩目	ナデ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	同一個体か
第11図５	須恵器甕	SK－04	－	－	－	叩目	ナデ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	同一個体か
第11図６	須恵器甕	SK－04	－	－	－	叩目	ナデ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	
第12図１	土師器甕	SK－01	－	8.4	－	ロクロ	ロクロ	ヘラケズリ	９世紀後葉～10世紀前葉	壺の可能性あり
第12図２	土師器甕	SK－01	－	5.6	－	－	ヘラ	ヘラケズリ	９世紀後葉～10世紀前葉	爪痕か
第12図３	土師器甕	SK－02	21.8	－	－	ロクロ	ロクロ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	
第12図４	土師器甕	SK－02	－	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	小型甕
第12図５	土師器坏	SK－03	－	5.5	－	ロクロ	ロクロ	回転糸切(右)	９世紀後葉～末葉	
第12図６	須恵器壺	SK－03	10.7	－	－	ロクロ	ロクロ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	刻書
第12図７	土師器甕	SK－04	－	－	－	ヘラケズリ	ヘラナデ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	放射状のケズリ痕
第12図８	土師器甕	SK－04	－	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	
第12図９	土師器坏	SK－04	13.1	－	－	ロクロ	ロクロ	－	９世紀後葉～末葉	
第12図10	土師器坏	SD－01	－	－	－	ヘラナデ	ロクロ	回転糸切(右)	10世紀初頭～前葉	
第12図11	土師器坏	SD－01	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	10世紀初頭～前葉	
第12図12	土師器甕	SD－03	－	－	－	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラケズリ	９世紀後葉～10世紀前葉	
第12図13	須恵器坏	SD－03	－	4.3	－	－	－	回転糸切(右)	10世紀初頭～前葉	火ダスキ痕
第13図１	土師器坏	SD－03	11.9	－	－	ロクロ	ロクロ	－	10世紀初頭～前葉	
第13図２	土師器坏	SD－03	12.7	－	－	ロクロ	ロクロ	－	10世紀初頭～前葉	
第13図３	須恵器壺	SD－03	－	－	－	ヘラケズリ	ロクロ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	
第13図４	須恵器壺	SD－03	－	－	－	叩目＋ヘラケズリ	ヘラケズリ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	
第13図５	土師器坏	SD－03	－	－	－	－	－	回転糸切(右)	10世紀初頭～前葉	
第13図６	土師器坏	Ｄ－５	－	－	－	－	－	回転糸切(右)	10世紀初頭～前葉	
第13図７	土師器坏	Ｄ－５	12.1	5.6	5.1	ロクロ	ロクロ	回転糸切(右)	10世紀初頭～前葉	
第13図８	土師器坏	Ｄ－５	－	－	－	－	－	回転糸切(右)	10世紀初頭～前葉	
第13図９	須恵器坏	Ｄ－５	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	10世紀初頭～前葉	
第13図10	須恵器坏	Ｄ－５	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	10世紀初頭～前葉	
第13図11	須恵器坏	Ｄ－５	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	10世紀初頭～前葉	
第13図12	須恵器坏	Ｄ－５	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	10世紀初頭～前葉	
第13図13	土師器坏	Ｄ－５	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	10世紀初頭～前葉	
第13図14	土師器坏	Ｄ－５	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	10世紀初頭～前葉	
第13図15	土師器坏	Ｄ－５	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	10世紀初頭～前葉	
第13図16	土師器甕	Ｄ－５	－	－	－	ヘラケズリ	ヘラナデ	－	９世紀後葉～10世紀前葉	
第13図17	土師器坏	Ｄ－５	－	－	－	ロクロ	ロクロ	回転糸切(右)	10世紀初頭～前葉	内面黒色処理
第13図18	土師器坏	Ｄ－５	－	4.3	－	ロクロ	ロクロ	回転糸切(右)	10世紀初頭～前葉	
第13図19	須恵器坏	Ｄ－５	－	－	－	ロクロ	ロクロ	回転糸切(右)	10世紀初頭～前葉	
第13図20	土師器坏	Ｄ－５	－	－	－	－	－	回転糸切(右)	10世紀初頭～前葉	
第13図21	土師器坏	Ｄ－５	－	－	－	－	－	回転糸切(右)	10世紀初頭～前葉	
第13図22	土師器坏	Ｅ－４	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	10世紀初頭～前葉	内面黒色処理
第13図23	土師器坏	Ｅ－５	－	－	－	ロクロ	ロクロ	－	10世紀初頭～前葉	

ま　と　め

野尻（４）遺跡は、青森市浪岡大字徳才子字山本地内に位置している。倉庫建設工事に先立ち、平成19年７月12日～８月９日の日程で建設予定地（524㎡）を対象に発掘調査を実施した。

調査の結果、竪穴状遺構２基、土坑５基、小ピット９基、溝状遺構４条を検出したほか、ダンボール箱換算で３箱分の土師器・須恵器等が出土した。

竪穴状遺構は方形・長楕円形の平面形を呈するが、カマド等、竪穴住居跡に類する施設は確認されず、その性格は不明である。土坑も方形・円形の平面形を呈し、やはり用途・機能は判然としない。また、４条検出された溝状遺構のうち、第３号溝状遺構は本遺跡における過去の調査で多く検出された外周溝を伴う建物跡の可能性が高いが、外周溝内側に配置される竪穴住居跡や柱穴跡は検出されなかった。

出土土器・降下火山灰などから、本調査における検出遺構は９世紀後葉～10世紀前葉の帰属時期が推定され、第１号・第２号竪穴状遺構（９世紀後葉～10世紀初頭）から第３号溝状遺構（10世紀初頭～前葉）への時期的変遷が窺える。かかる見解は、過去の調査成果（青森県教育委員会1995ａ・浪岡町教育委員会2004）とも整合しており、今回の調査区は本遺跡の集落縁辺に位置するものと想定される。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護の趣旨をご理解いただき、本発掘調査実施にあたりご協力賜った株式会社大進建設に対しまして深くお礼申し上げます。

（担当者一同）

引用・参考文献

青森県教育委員会　1987　『山本遺跡発掘調査報告書』
青森県教育委員会　1994　『山元（３）遺跡』
青森県教育委員会　1995ａ　『野尻（２）遺跡Ⅱ・野尻（３）遺跡・野尻（４）遺跡』
青森県教育委員会　1995ｂ　『山元（２）遺跡』
青森県教育委員会　1995ｃ　『野尻（２）遺跡』
青森県教育委員会　1997ａ　『高屋敷館遺跡発掘調査概報』
青森県教育委員会　1997ｂ　『垂柳遺跡・五輪野遺跡』
青森県教育委員会　1998ａ　『野尻（１）遺跡Ⅰ』
青森県教育委員会　1998ｂ　『高屋敷館遺跡』
青森県教育委員会　1999　『野尻（１）遺跡Ⅱ』
青森県教育委員会　2000　『野尻（１）遺跡Ⅲ』
青森県教育委員会　2002　『野尻（１）遺跡Ⅳ』
青森県教育委員会　2003　『野尻（１）遺跡Ⅴ』
青森県教育委員会　2004　『野尻（１）遺跡Ⅵ・野尻（２）遺跡Ⅲ』
青森県教育委員会　2005ａ　『高屋敷館遺跡Ⅲ』
青森県教育委員会　2005ｂ　『山元（１）遺跡』
青森県教育委員会　2006　『野尻（３）遺跡Ⅱ』
青森市　2006　『新青森市史』資料編１（考古）
青森市教育委員会　2001　『新町野遺跡発掘調査報告書Ⅱ・野木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
青森市教育委員会　2007ａ　『月見野（１）遺跡発掘調査報告書』
青森市教育委員会　2007ｂ　『市内遺跡発掘調査報告書15』
青森市教育委員会　2007ｃ　『合子沢松森（２）遺跡発掘調査報告書』
青森市教育委員会　2007ｄ　『石江遺跡群発掘調査報告書』
小山正忠・竹原秀雄　1993　『新版標準土色帳』農林省農林水産技術会議
五所川原市教育委員会　2004　『五所川原須恵器窯跡群』
櫻井清彦　1958　「東北地方北部における土師器と竪穴に関する諸問題」『館址』東京大学出版会
浪岡町史編集委員会　2000　『浪岡町史』第１巻
浪岡町教育委員会　2004　『青森県浪岡町　野尻（４）遺跡』

写 真 図 版

調査区全景（南→）

SD－03全景（北西→）

写真１　検出遺構（１）

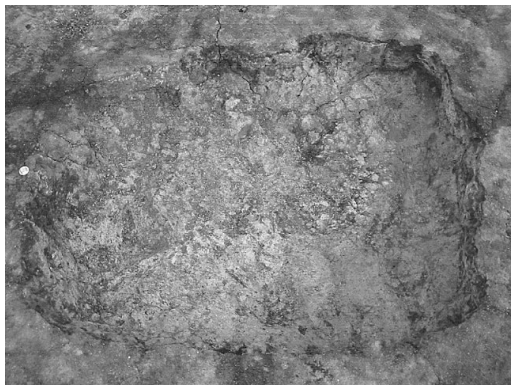
基本層序①（西→）

基本層序②（北→）

SI－01火山灰（南西→）

SI－01完掘（北→）

SI－02完掘（南→）



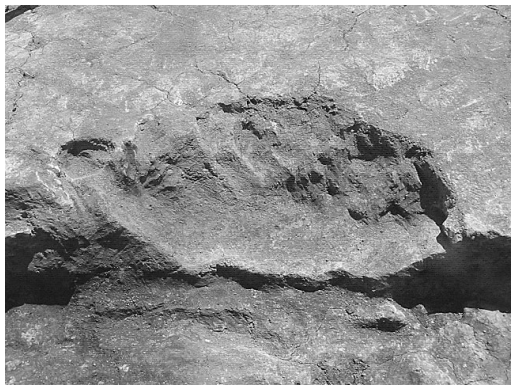
SK－01完掘（南→）

SK－02完掘（南→）

SK－03完掘（南東→）

写真２　検出遺構（２）

SK－04完掘（北→）



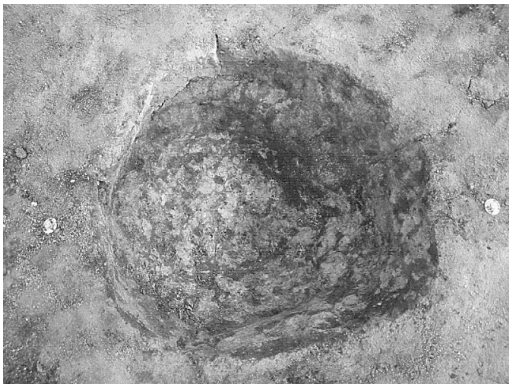
SK－05完掘（西→）

SP－01完掘（北西→）

SP－02完掘（南東→）

SP－03完掘（北→）

SP－04完掘（北→）

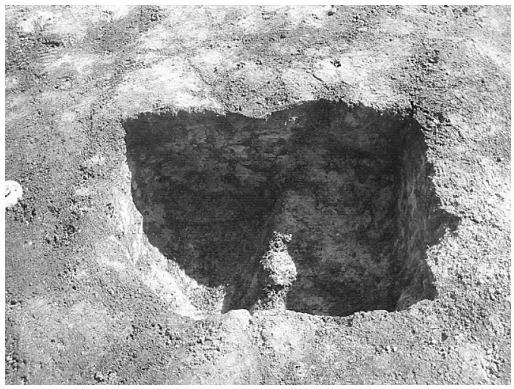


SP－05完掘（北→）

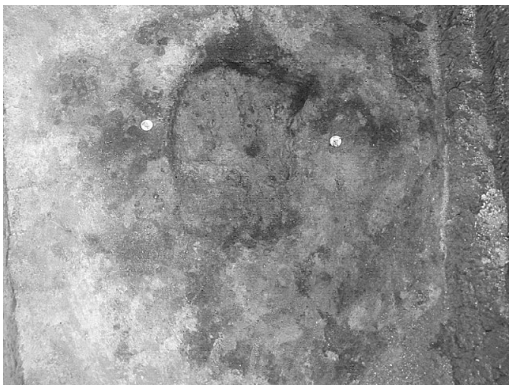
SP－06完掘（北→）

写真３　検出遺構（３）

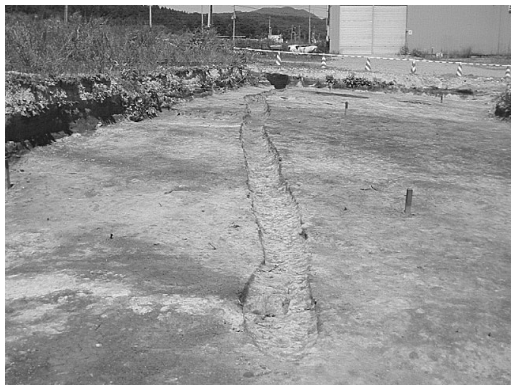
SP－07完掘（北→）



SP－08完掘（北→）

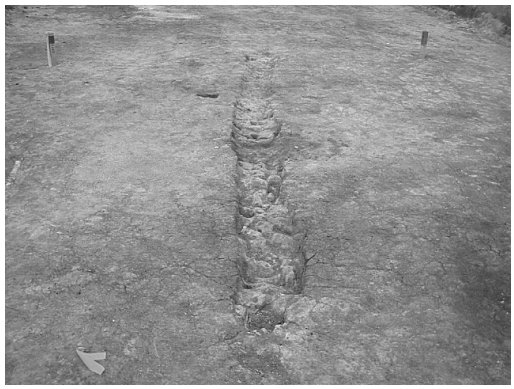


SP－09完掘（北→）



SD－01完掘（南東→）

SD－01近景（北西→）



SD－02①完掘（南→）

SD－02②・SD－04完掘（南→）

D－5グリッド土器集中区（北→）

写真４　検出遺構（４）

7-1

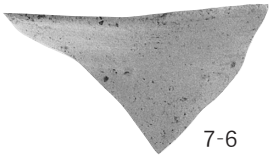
7-2

7-3

7-4

7-5

（7-5拡大）


7-6

7-7

7-8

7-9

7-10

8-1

8-2

8-3

8-4

8-5

8-6

8-7

S＝1/3

写真５　出土遺物（１）

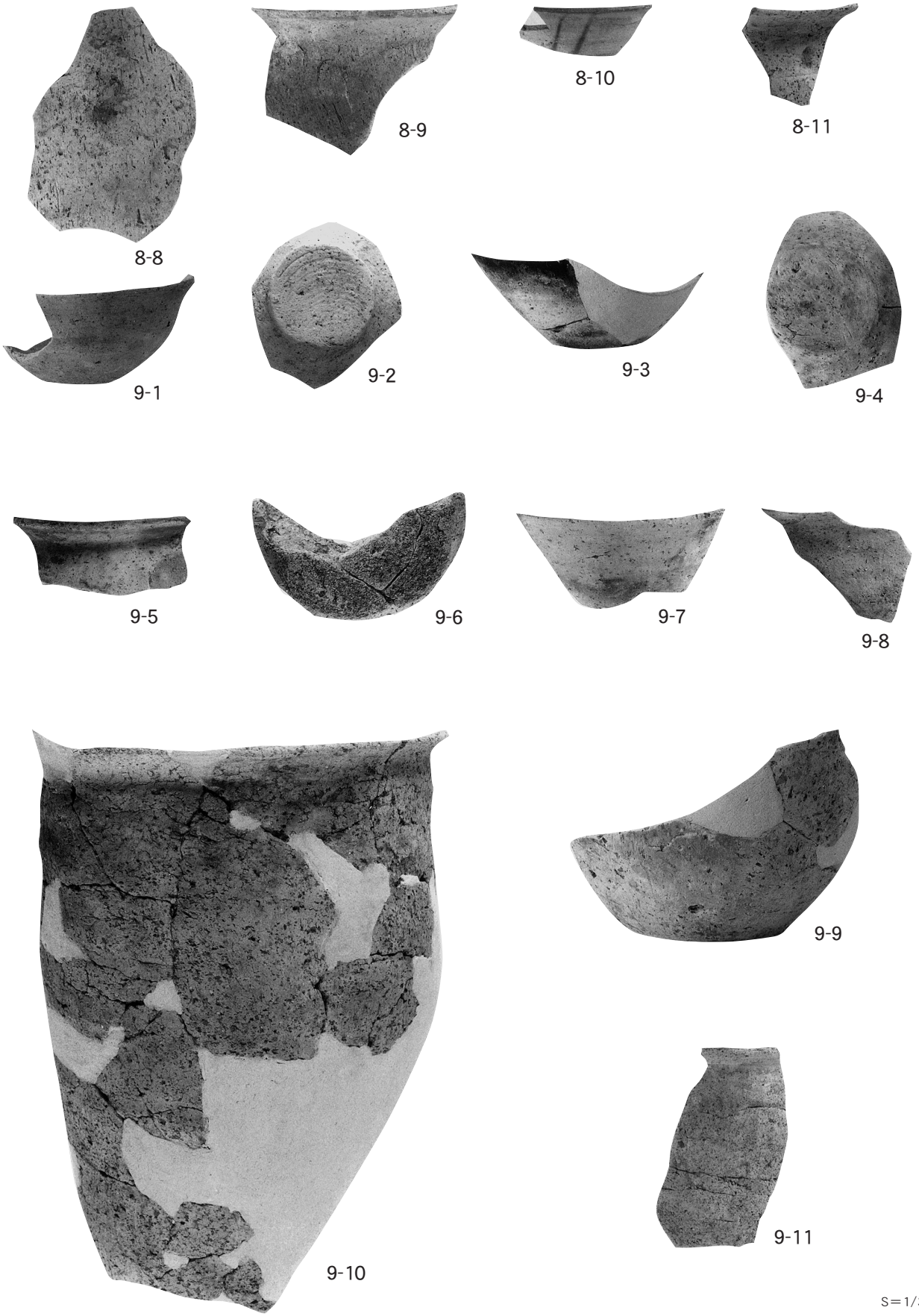
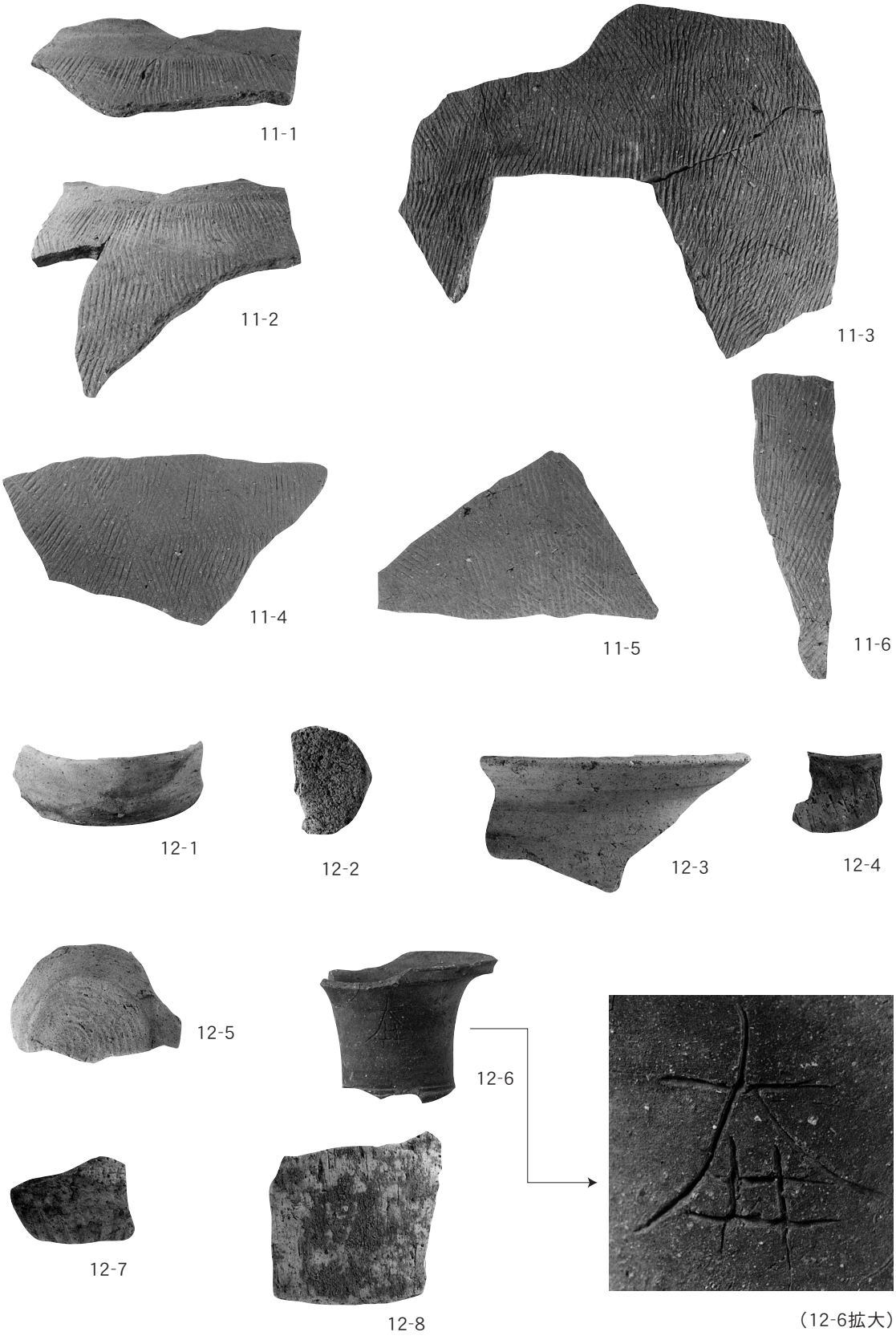
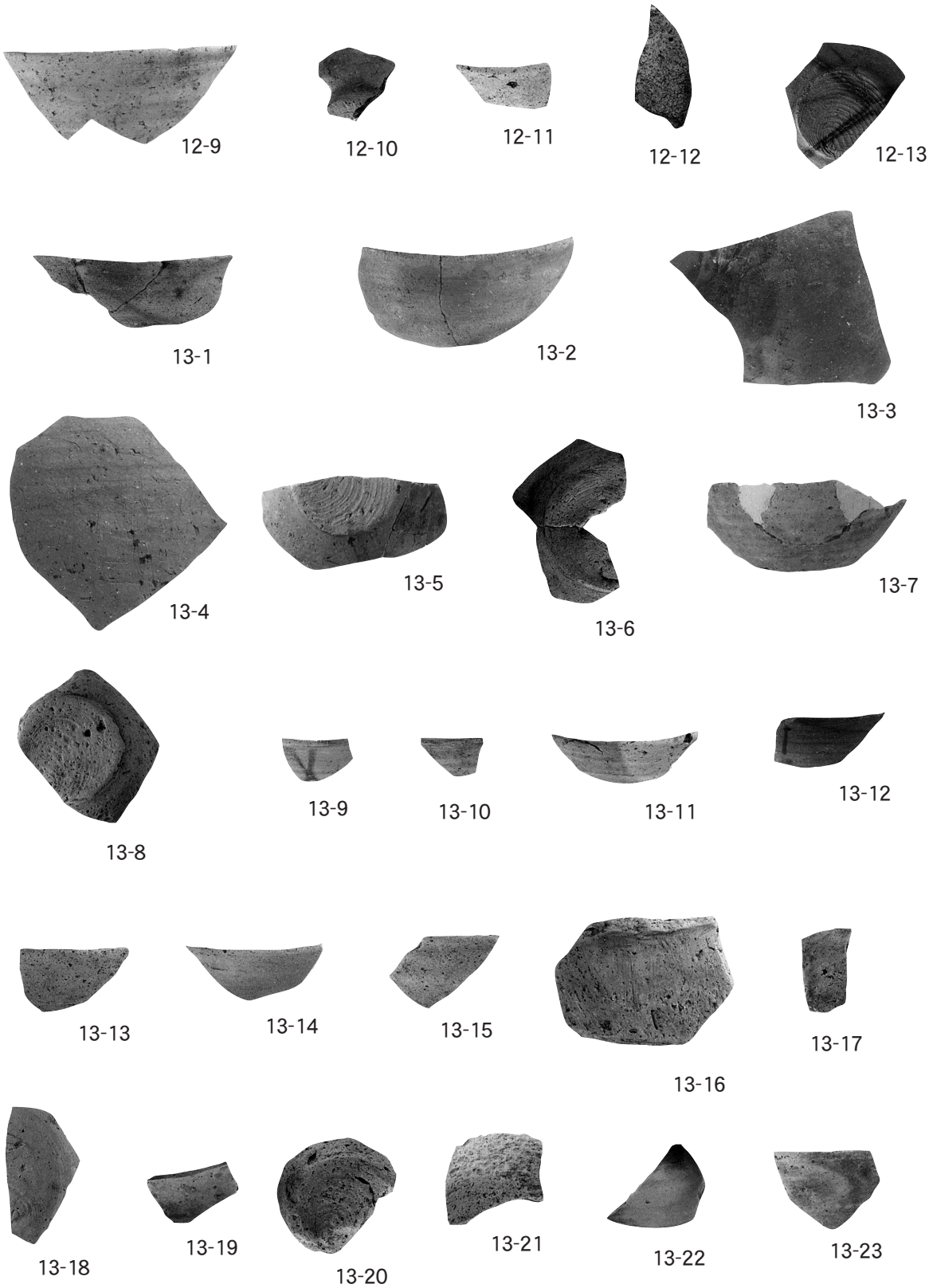


写真６　出土遺物（２）



S＝1/3

写真７　出土遺物（３）



S＝1/3

写真８　出土遺物（４）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	のじりかっこよんいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書 名	野尻（4）遺跡発掘調査報告書
副 書 名	
巻 次	
シ リ ー ズ 名	青森市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第95集
編 著 者 名	設楽政健、野坂知広
編 集 機 関	青森市教育委員会
所 在 地	〒038-8505　青森県青森市柳川二丁目１番１号　TEL017－761－4796
発 行 年 月 日	西暦2008年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
野尻(4)遺跡（のじりいせき）	青森県青森市（あおもりけんあおもりし） 浪岡大字徳才子字（なみおかおおあざとくさいしあざ） 山本105-2・3（やまもと）	02364	29063	40° 11′ 14″	141° 48′ 19″	20070712 ～ 20070809	524㎡	倉庫建設工事に先立つ事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野尻(4)遺跡	集落跡	平安時代	竪穴状遺構　2基 土　坑　5基 小ピット　9基 溝状遺構　4条	土師器・須恵器	

要 約	１．野尻(4)遺跡は、津軽半島にまで連なる前田野目台地上、標高50メートル内外の地点に位置している。 ２．発掘調査は倉庫建設予定地524㎡を対象に実施した。 ３．調査の結果、平安時代の竪穴状遺構２基、土坑５基、小ピット９基、溝状遺構４条と土師器や須恵器などの遺物を検出した。主体時期は９世紀後葉～10世紀前葉である。

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962	『三内霊園遺跡調査概報』
〃	2	1965	『四ツ石遺跡調査概報』
〃	3	1967	『玉清水遺跡調査概報』
〃	4	1970	『三内丸山遺跡調査概報』
〃	5	1971	『野木和遺跡調査報告書』
〃	6	1971	『玉清水Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
〃	7	1971	『大浦遺跡調査報告書』
〃	8	1973	『孫内遺跡発掘調査報告書』
		1979	『螢沢遺跡』
		1983	『四戸橋遺跡調査報告書』
青森市の埋蔵文化財		1983	『山野峠遺跡』
		1985	『長森遺跡発掘調査報告書』
		1986	『田茂木野遺跡発掘調査報告書』
		1987	『横内城跡発掘調査報告書』
		1988	『三内丸山Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
青森市埋蔵文化財調査報告書			
〃	第16集	1991	『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』
〃	第17集	1992	『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』
〃	第18集	1993	『三内丸山(2)遺跡発掘調査概報』
〃	第19集	1993	『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第20集	1993	『小牧野遺跡発掘調査概報』
〃	第21集	1994	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第22集	1994	『小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第23集	1994	『三内丸山(2)・小三内遺跡発掘調査報告書』
〃	第24集	1995	『横内遺跡・横内(1)遺跡発掘調査報告書』
〃	第25集	1995	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第26集	1995	『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第27集	1996	『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』
〃	第28集	1996	『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第29集	1996	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第30集	1996	『小牧野遺跡発掘調査報告書』
〃	第31集	1997	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第32集	1997	『桜峯(1)遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃	第33集	1997	『新町野遺跡試掘調査報告書』
〃	第34集	1997	『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第35集	1997	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃	第36集	1998	『桜峯(1)遺跡発掘調査報告書』
〃	第37集	1998	『新町野遺跡発掘調査報告書』
〃	第38集	1998	『野木遺跡発掘調査報告書』
〃	第39集	1998	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第40集	1998	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
〃	第41集	1998	『野木遺跡発掘調査概報』
〃	第42集	1998	『熊沢遺跡発掘調査概報』
〃	第43集	1999	『市内遺跡詳細分布調査報告書』
〃	第44集	1999	『葛野(2)遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃	第45集	1999	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
〃	第46集	1999	『新町野・野木遺跡発掘調査概報』
〃	第47集	1999	『稲山遺跡発掘調査概報』
〃	第48集	2000	『熊沢遺跡発掘調査報告書』
〃	第49集	2000	『稲山遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃	第50集	2000	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
〃	第51集	2000	『桜峯(1)・雲谷山吹(3)遺跡発掘調査報告書』
〃	第52集	2000	『大矢沢野田(1)遺跡調査報告書』
〃	第53集	2000	『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第54集	2001	『新町野遺跡発掘調査報告書Ⅱ・野木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃	第55集	2001	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅵ』
〃	第56集	2001	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
〃	第57集	2001	『稲山遺跡発掘調査概報Ⅲ』
〃	第58集	2001	『大矢沢野田(1)遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃	第59集	2001	『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第60集	2002	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅶ』
〃	第61集	2002	『大矢沢野田(1)遺跡発掘調査報告書』
〃	第62集	2002	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
〃	第63集	2002	『稲山遺跡発掘調査概報Ⅳ』
〃	第64集	2002	『市内遺跡発掘調査報告書』
〃	第65集	2003	『雲谷山吹(4)～(7)遺跡発掘調査報告書』
〃	第66集	2003	『稲山遺跡発掘調査報告書』
〃	第67集	2003	『深沢(3)遺跡発掘調査報告書』
〃	第68集	2003	『近野遺跡発掘調査報告書』
〃	第69集	2003	『市内遺跡発掘調査報告書11』
〃	第70集	2003	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅷ』
〃	第71集	2004	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅳ』
〃	第72集	2004	『稲山遺跡発掘調査報告書Ⅴ』
〃	第73集	2004	『新町野遺跡発掘調査概報』
〃	第74集	2004	『市内遺跡発掘調査報告書12』
〃	第75集	2004	『江渡遺跡発掘調査報告書』
〃	第76集	2005	『栄山(3)遺跡発掘調査報告書』
〃	第77集	2005	『赤坂遺跡発掘調査報告書』
〃	第78集	2005	『三内丸山(8)遺跡発掘調査報告書』
〃	第79集	2005	『市内遺跡発掘調査報告書13』
〃	第80集	2005	『合子沢松森(2)遺跡発掘調査概報』
〃	第81集	2005	『石江遺跡群発掘調査概報』
〃	第82集	2006	『三内沢部(3)遺跡発掘調査報告書』
〃	第83集	2006	『合子沢松森(2)遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃	第84集	2006	『新町野遺跡発掘調査概報Ⅱ』
〃	第85集	2006	『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅸ』
〃	第86集	2006	『市内遺跡発掘調査報告書14』
〃	第87集	2006	『新町野遺跡発掘調査報告書Ⅲ』
〃	第88集	2006	『史跡高屋敷館遺跡環境整備報告書Ⅱ』
〃	第89集	2006	『篠原遺跡発掘調査報告書』
〃	第90集	2007	『月見野(1)遺跡発掘調査報告書』
〃	第91集	2007	『市内遺跡発掘調査報告書15』
〃	第92集	2007	『新町野遺跡発掘調査概報Ⅲ』
〃	第93集	2007	『合子沢松森(2)遺跡発掘調査報告書』
〃	第94集	2007	『石江遺跡群発掘調査報告書』

青森市埋蔵文化財調査報告書　第95集

野尻(4)遺跡発掘調査報告書

発行年月日　平成20年３月31日

発　　行　青森市教育委員会
〒038-8505　青森市柳川二丁目１番１号
TEL　017－761－4796

印　　刷　株式会社　誠　　工　　社
〒030-0113　青森市第二問屋町三丁目３－18
TEL　017－729－1611